野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事に関する

アンケート調査報告書

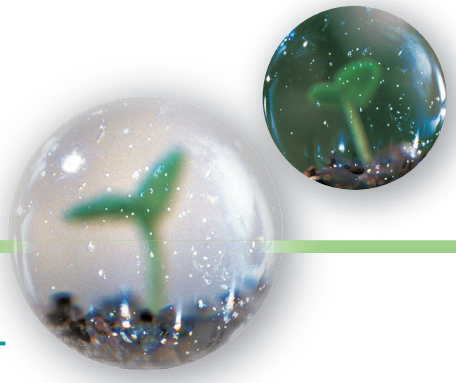
2018年3月

弘前大学人文社会科学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター

地域未来創生センター

Innovative Regional Research Center



は　じ　め　に

東日本大震災から間もなく7年の歳月が過ぎようとしています。被災地では多くの課題は残されていますが、着実に平穏な日常を取り戻しています。弘前大学とチーム北リアスは、震災直後から岩手県九戸郡野田村の復旧・復興事業をお手伝いさせていただいています。瓦礫撤去や支援物資の仕分け、そして交流事業に至るまで、野田村の皆さまに寄り添って歩んできました。また、支援活動と並行して、震災の記憶を記録する事業や生活実態を把握する調査事業、そして地域資源を発掘する事業などにも取り組んできました。

本報告書は、これまでの支援・交流事業の一環として、震災から6年が過ぎた2017年8月に実施いたしました「野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事に関する」アンケート調査の結果をまとめたものであります。この調査は、これからの持続可能な村づくりを考えるために、野田村出身者の地域間移動に焦点を当てて、2017年8月現在の野田村出身者のみなさまのお暮らしとお仕事の状況を調査したものであります。

本調査報告書が、震災からの長期的な復興政策や持続可能な村づくりの長期戦略を立案する上で貴重な基礎資料として一助になれれば幸いです。

この調査にあたり、ご協力いただきました皆さまや関係機関などに、心から感謝申し上げます。

2018年3月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター長　　李　　永　俊

目　　次

はじめに

第１章　調査の概要 …… 1
1．　調査の背景と目的 …… 1
2．　調査の方法 …… 1
3．　調査結果の概要 …… 2
4．　報告書の構成 …… 4

第２章　移動動向と移動者の生活実態 …… 7
1．　野田村の人口推移 …… 7
2．　村民の移動実態とその特徴 …… 8
3．　移動時期と移動理由 …… 10
4．　タイプ別生活実態 …… 12
5．　移動者の特徴　―多項ロジット回帰分析― …… 13
6．　生活満足度 …… 14
7．　まとめ …… 16

第３章　震災と移動 …… 18
1．　震災以前と以降の移動実態比較 …… 18
2．　震災による住まいと仕事への影響と移動 …… 19
3．　震災による人的ネットワークの変化と移動 …… 20
4．　震災前後の移動理由の違い …… 21
5．　被害有無と移動との関係 …… 22
6．　被害有無と今後のUターンの可能性 …… 23
7．　まとめ …… 24

第４章　震災7年目の生活復興感 …… 25
1．　生活復興感とその規定因 …… 25
2．　震災をきっかけとした生活の変化と現在の生活満足度 …… 26
3．　震災をきっかけとした生活の変化 …… 29

第５章　ジェンダーからみた野田村出身者の意識について …… 34
1．　居住地（移動タイプ）別の属性の特徴 …… 34
2．　人とのつながりの変化や出来事について …… 36
3．　生活満足度や幸福度について …… 38
4．　村内居住者の将来の居住希望 …… 39
5．　おわりに …… 40

第６章　野田村をめぐる移動パス …… 42
1．　問題 …… 42
2．　方法 …… 43
3．　結果 …… 43

付　録 …… 49
回答者集計表 …… 49
回答者用質問紙 …… 75

第１章　調査の概要

李　永俊

１．　調査の背景と目的

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、東北地域の広範囲にわたって甚大な被害をもたらした。人的な被害のみならず、住民生活の基盤となる住まいや職場なども一瞬にして失われたのである。震災から 6 年半が経過し、世間では震災の記憶が薄れているが、被災地では着実に一歩一歩復興への歩みが進んでいる。

しかし、岩手県沿岸北部などの小規模被災地域では、東日本大震災以前からの人口減少問題が復興における最大の阻害要因となっている。新しい事業を始めるにも将来の正確な人口規模が予測できなければ的確な投資を行うことは難しい。また、過剰な投資は将来に渡って地域住民の負担となりかねない。そのため、地域住民の定住や移住に関する意向調査が必要不可欠である。

北リアス地域の若者は、高校進学時や高校卒業時に 8 割近くの若者が村を離れ、村外へ移住する。正確な将来人口予測を立てるためには、すでに村を離れている若者がいつ、どの程度帰還するかが重要なカギとなる。すでに村を離れている若者に対する帰還意向を調査するためには、本事業で計画している同窓会調査を用いることが的確である。本調査では、①村を離れている人の居住地域と現在の生活実態、②帰還の意向、③移動決定や帰還意向に震災や復興状況がどのように影響しているのか、④地域との関わりや外部ボランティアとの関わりの影響などを明らかにすることを目的とする。

２．　調査の方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

・調査対象者と回答者数

調査対象者は、岩手県野田村立野田中学校卒業者で、調査時点で 20 歳から 60 歳までの同窓生の中で、ご協力が得られた男女 1276 名を調査対象とした。

・調査法

郵送による質問紙法を用いた。

・調査期間

2017 年 8 月～9 月

3.　調査結果の概要

3-1　回収状況

対象者の有効回答は 307 名だった。住所不明で帰ってきた無効票 149 名と返送されてきた 3 票の無効票を除いて計算した回収率は 307/1124 で 27.3%だった。

3-2　回答者のプロフィール

図の 1-1 から 1-4 に、回答者の属性をまとめた。

性別の構成比では、男性が 155 名で全体の 50.5%、女性が 148 名で 48.2%となっており、男性が若干多くなっている。また、年齢階級別の構成比では、20 代が 142 名で最も多く全体の 46.6%、30 代が 39 名で 12.8%で、30 代以下が全体の 59.4%に上る。40 代は 79 名で 25.9%、50 代は 34 名で 11.2%である。2013 年に筆者らが実施した「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」と比較すると若年層の割合が多くなっている。

図 1-1　回答者の性別（%）

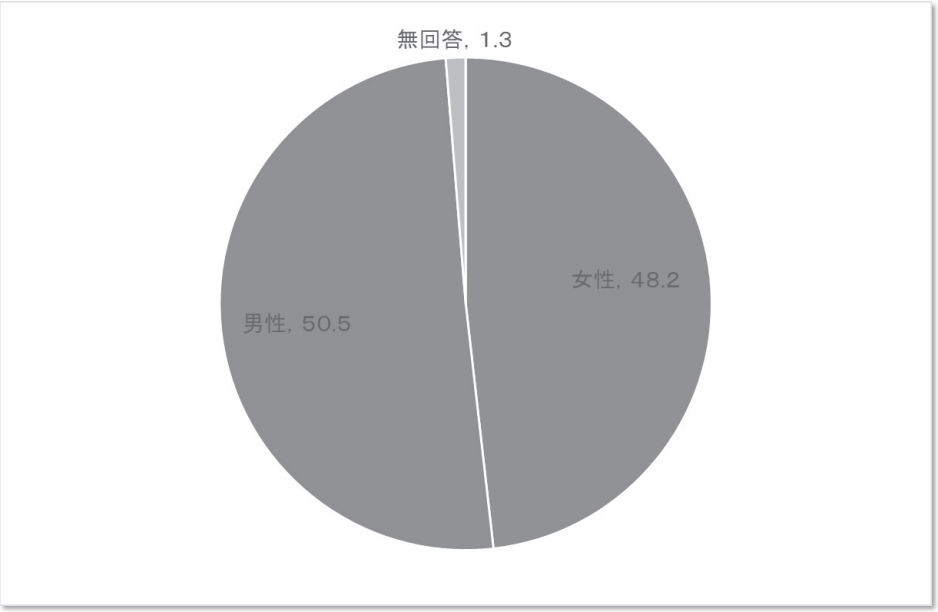
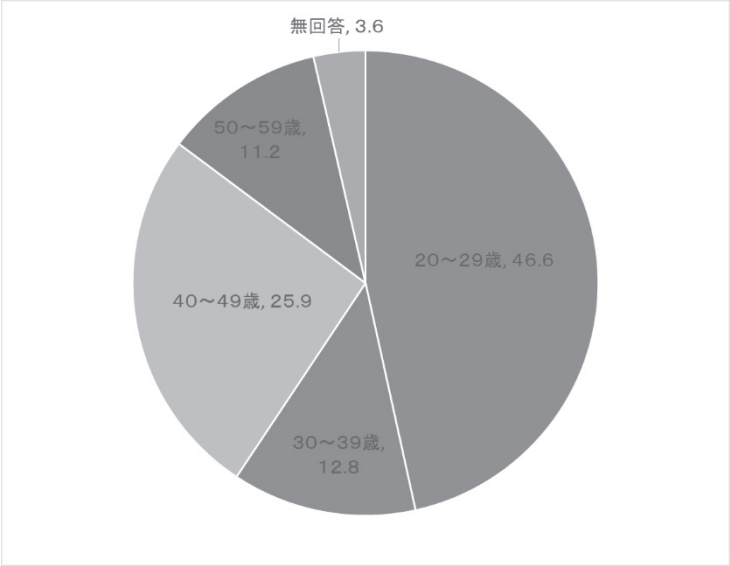


図 1-2　回答者の年齢構成（%）



地域間の移動に注目するために、回答者の地域間移動有無によって次のように分類する。定住者は一度も野田村を出ることなく、住み続けている人と定義する。Uターン者は野田村を出て、他地域での生活経験を持ち、野田村に帰ってきた人を言う。流出者は野田村を出て、現在も村外に住んでいるものを指す。各タイプ別の割合をみると、定住者が 75 名で 24.4%、Uターン者が 51 名で 16.1%であるのに対し、流出者が 181 名で 59.0%となっており、流出者の割合が高いことが分かる。

図 1-3　タイプ別構成比（%）

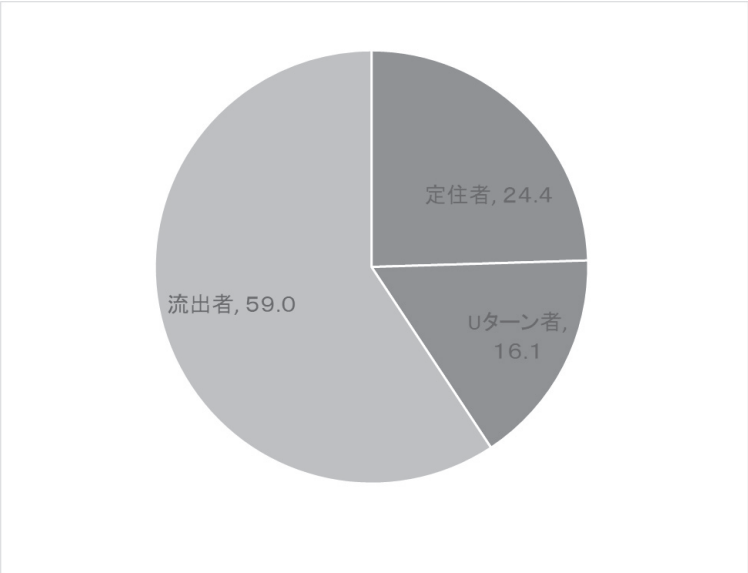
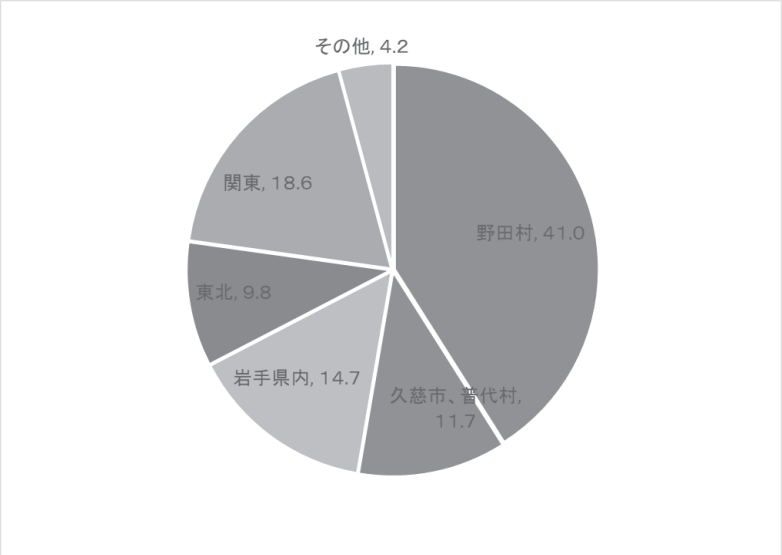


図 1-4　現在の住まいの地域別構成比（%）



最後に現在の住まいの地域別構成比をみると、野田村に住んでいる人が 126 名で 41.0%、久慈市、普代村に在住している人は 36 名で 11.7%である。岩手県内は 45 名で 14.7%、その他の東北圏が 30 名で 9.8%となっている。次は、関東で 57 名、18.6%、その他の地域が 13 名で 4.2%となっている。比較的に野田村と違い、久慈・普代村と岩手県内を合わせると 81 名、26.3%に上っており、近場での移住が多いことが分かる。

4.　報告書の構成

この報告書はこの章を含めて全 6 章で構成されている。

第 2 章では、野田中学校出身者が何時、どのような理由で、移動しているのか、そして移動者にはどのような特徴があるのかを検討した。その結果、野田村からの流出は 20 代前半までに、進学や就職を主な理由として行われていることが分かった。逆に、流出者の帰還については、若者に限らず全ての年齢層で帰還が行われていることが分かった。しかし、帰還者の割合は流出者の 2 割に満たず、呼び戻しが十分でないことが明らかになった。そして、流出者の特徴としては、女性、若年者、高学歴者、高所得者が多く、毎日の生活における満足度も高い。

ただし、最後に行った幸福度の分析では、タイプ間の有意な差は認められず、幸福度の差が結婚有無か、子供の有無に大きく左右されていることが分かった。つまり、幸福度を決めるのはどこに住んでいるのかではなく、家族と一緒に生活しているか否かに大きく依存していることが分かった。

今後の村づくりにおいてのヒントとしては、流出を抑制するためには女性や若者を中心

においた村づくりを考える必要があることと、村民の幸福度を高めるためには、既婚者や子育て世代にやさしい村づくりが求められていると思われる。また、村への呼び込み・呼び戻しのためには高学歴者向けの仕事づくりや場づくりが必要であると言える。

第 3 章では、調査結果を用いて、震災による被害の有無が住まいの選択にどのような影響を与えているのかを検証した。分析の結果、住まいの被害は被災地住民にとっては住まいの選択に大きな影響を及ぼしていたことが分かった。また、地域の仲間の損失が流出の確率を高めることも明らかになった。

以上の結果から、小規模地域において大きな災害から地域を守り抜くためには、災害に強い住まいづくりと、万が一の場合は速やかに避難所や仮住まいを確保することが重要であることが分かった。また、平時からの地域コミュニティづくりが災害に強い地域づくりにつながることを分析の結果は含意している。今後の地域づくりには、流出した人材の呼び戻しが欠かせない。その呼び戻しにおいても、家族や親せき、あるいは地域の仲間の人的ネットワークが最大の吸引力となりうることを分析の結果は示唆している。

第 4 章では震災 7 年目の復興感について、東日本大震災津波の際に野田村に居住していた 177 名を対象として分析を行なった。

「あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」という質問に対する回答は、「ほぼ復興」が 72.3%、「半分以上復興」が 13%、「やや進んでいる」が 9.6%、「まったく進んでいない」が 2.8%だった。また、「あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」への回答は、「ほぼ復興」が 19.2%、「半分以上復興」が 47.5%、「やや進んでいる」が 30.5%、「まったく進んでいない」が 2.3%だった。2013 年の調査と比較すると、生活の復興も、野田村の復興も進んでいるとみなされているものの、特に野田村の復興はまだ十分ではないと考えられている。

生活復興感、野田村復興感と関連の強い質問項目を AIC を用いて分析した。生活復興感と関連が強かったのは、震災から 6 年がたって「自分だけが頼りという気持ちが増した」という項目（「あてはまらない」人の方が生活復興感が強い）と、「被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた」という項目だった。一方、野田村復興感と関連が強かったのは、「行政への頼もしさが増した」という項目だった。

震災前の生活と比べた現在の生活の変化（「忙しく活動的な生活を送ること」、「自分のしていることに生きがいを感じること」など 8 項目について、「かなり増えた」から「かなり減った」の 5 件法で質問）、および、現在の生活の満足度（「毎日のくらし」、「ご自分の健康」など 6 項目について、「たいへん満足」から「たいへん不満」の 5 件法で質問）を数量化Ⅲ類を用いて分析したところ、生活復興パターンには 3 つの類型があることが示唆された。すなわち、震災が生活に大きな変化をもたらさなかった「復旧型」、震災が肯定的な変化をもたらした「再建型」、否定的な変化をもたらした「退却型」である。

現在の生活満足度と「生活復興感」の間には関連はみられなかった。このことは、全体と

して「ポスト復興期」ないし日常期に入っていることを示唆している。

第5章では、野田村出身の人々の暮らしや満足度について、とりわけジェンダーに注目して分析を行った。まず、現在、野田村以外で居住している人については、将来的に野田村に戻る希望や戻る予定に関して、男女で差はなかった。しかし、実際に野田村に帰っている頻度は女性の方が男性よりも高く、村外の女性は現実的にすでに野田村との接点を多く持っていた。また意識の面について、定住・Uターン・流出の移動パターンごとの幸福度をみると、男性間には差がないが、男女合わせたなかでも、女性は定住者が最も幸福度が低く、逆に流出者は突出して幸福度が高かった。また野田村内に現在居住している女性は、男性に比べて、村外に引っ越したいという希望もやや高かった。今回の調査の対象者に未来を担う若年者が多いことを考慮すると、この結果はいっそう深刻なものである。女性が住みたい村となるように、とりわけ女性にとって魅力的な村づくりが求められるだろう。

第6章では、野田村からの移動者がどのような地理的範囲で移動をしていったのか、トラックのパターンを調べるためにデータの整理・分析を行った。震災後の移動として、震災後に移動しそのまま野田村に戻らなかった群、震災後に移動し野田村に戻ってきた群のトラックを抽出し、それぞれの群の回答者が、具体的にどの地域に移動していったのかを分岐図の形式で整理した。なお、移動地域については基本的に都道府県レベルで整理を行い、野田村、久慈市、盛岡市のみ下位カテゴリによる集計を行った。続いて、野田村関係者のライフステージで生じている移動の状況を調べるため、（震災前後に限らず）野田村から移動して、現在も野田村外で居住している群（流出者183名）と、野田村から移動したが現在は野田村に居住している群（Uターン者49名）のトラックを抽出した。こちらのデータについても、同様に、それぞれの群の回答者が、具体的にどの地域に移動していったのかを、分岐図として整理した。サンプル数が少ないためあくまで限定的な結果であることに留意する必要があるが、分岐図の示すパターンとして、下記の事項が示唆されている。１）Uターン者の移動先のバリエーションに比して、流出者の移動先のバリエーションが大きい。ただし地理的な範囲としては大きな違いはなく、両者とも岐阜県・愛知県を南端とする。２）最初の移動がその先の移動先を規定している。最初の移動には、大きく東北圏内か関東圏というパターンがあり、その後の移動先は同圏内にとどまる。ただし中核となる県への移住者においては、圏間の移動が生じている（例：神奈川―北海道）。多次元尺度法などを活用した詳細な分析は次年度以降の課題としたい。

分析結果の詳細については、各章を参照されたい。

第 2 章　移動動向と移動者の生活実態

李　永俊

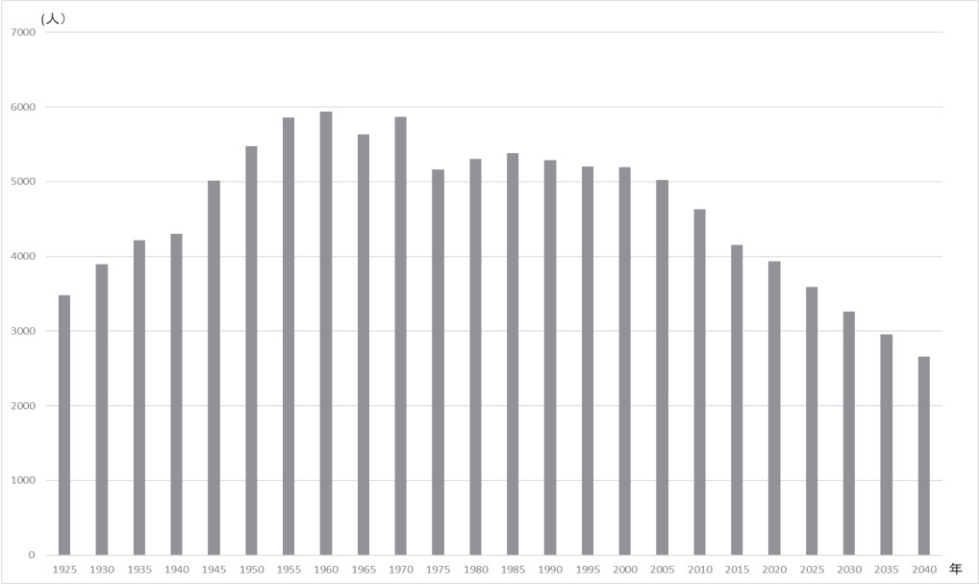
本章では、アンケート調査から見えた野田中学校出身者の移動状況と移動先での生活実態を明らかにする。東日本大震災からの復興と将来にわたる持続可能な村づくりにおいて、人口の動向は極めて重要な要因となる。将来の人口予測が実態に沿った正確なものであれば、将来の人口サイズに合う村づくりが可能で、限られている復興予算を無駄なく、有効に活用することができる。

本章では、アンケート調査結果を用いて、野田中学校出身者が何時、どのような理由で移動しているのか、また移動後に U ターンする者と移動先で定住する者にどのような特徴があるのかを明らかにする。そして、定住者や U ターン者、移住先での定住者がそれぞれどのような生活を送っているのかをデータを通して概観する。

1.　野田村の人口推移

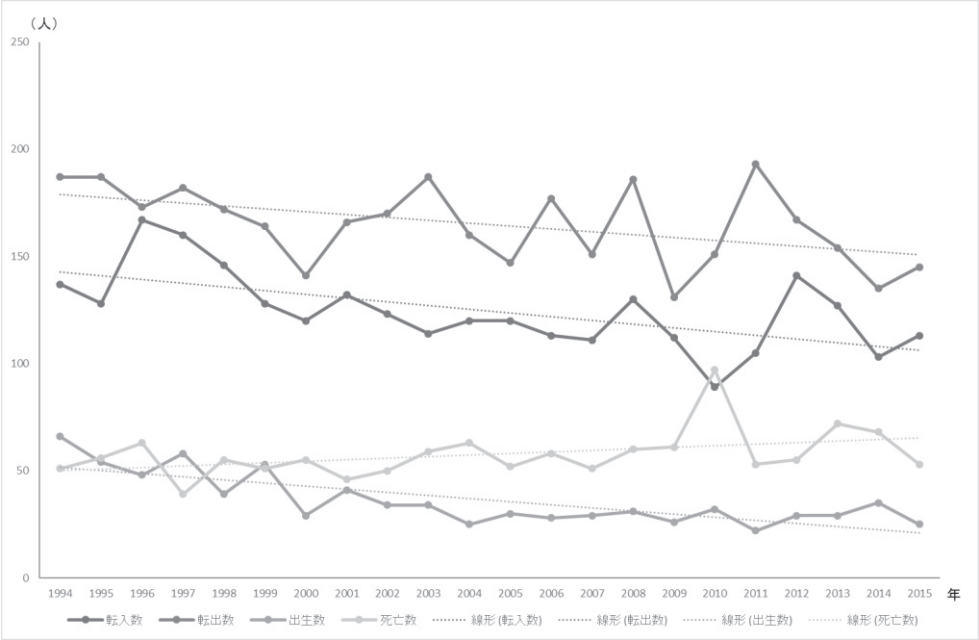
野田村の総人口は、1960 年がピークで 5935 名であった。河村（2015）によると、1966 年に玉川炭鉱を昭和鉱業（株）が経営することになり、第二斜抗に着手するなど、事業を拡大するに伴い、人口も一時的に増加したようだ。しかし、貿易自由化や採掘条件の悪化などで当社が会社更生法の適用を受けたことから、人口が急減した。その後、1975 年に国鉄久慈線が開通すると通学や通勤の利便性が高まり、ベットタウンとしての役割を果たし、人口の減少は見られない。

図 2-1　野田村の人口推移



出所：総務省『国勢調査』、国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口』

図 2-2　自然動態と社会動態



出所：総務省『国勢調査』

1990 年のバブル景気の際にも大きな人口の流出はなく、人口を維持してきた。その後、バブル崩壊後の景気低迷期には転出者数が減少しており、社会的な減少は小幅に留まっていた。しかし、2000 年の行財政改革に伴う公共事業の大幅な縮小や規制緩和などが、地方の経済を直撃した。その影響で、野田村でも人口の流出が大幅に増大することになった。また図 2-2 が示している通り、1990 年代後半から死亡数が出生数を上回るようになった。社会減に自然減による人口減少も加わり、村の人口は大幅に減少することになる。2011 年の東日本大震災の影響については、一時的に転出が上昇している様子はうかがえるが、翌年には転出が減少しており、震災の影響が一時的であったことが分かる。

今後の人口動向については、長期にわたるトレンドとして、少子高齢化に伴う人口の自然減が今後より拡大することが予想される。このような状況で、若年者の流出による社会減を減らさなければ村の存続は危ういことになる。今後の持続可能な地域づくりにおいて、流出の抑制と流出した人材の呼び戻しや新たな人材の呼び込みが欠かせないものである。本章では、呼び戻し、呼び込みの可能性について検討したい。

2．　村民の移動実態とその特徴

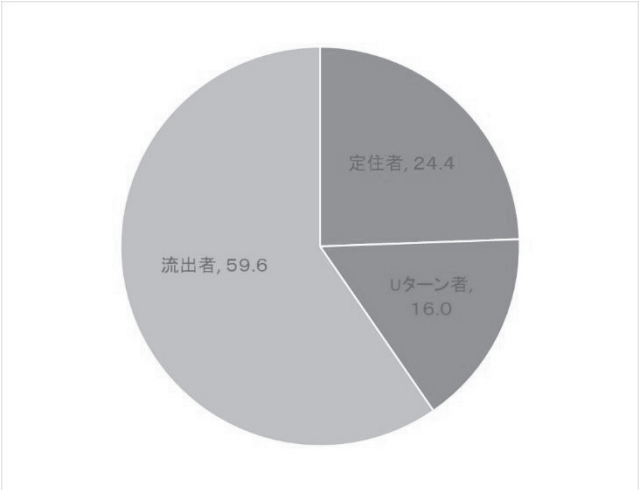
ここでは、野田中学校同窓会調査を用いて、村民の移動の実態を明らかにしたい。この調査では、調査時点である 2017 年 8 月に、20～60 歳となる野田中学校卒業者を調査対象とした。全員が野田中学校卒業者であるので、野田村出身者と見なす。

以降の分析では、移動のパターンによって三つのタイプに区分する。タイプ 1 は定住者で、一度も野田村を離れて生活したことのない者をいう。タイプ 2 は U ターン者で、野田中学校を卒業後、ある時点

で野田村を離れて生活した経験を持ち、現在は野田村に居住している者を指す。タイプ 3 は、流出者で野田中学校を卒業後、ある時点で野田村を離れ、現在も野田村以外で生活している者をいう。図 2-3 はタイプ別の構成比を示している。図から定住者が 24.4%、Uターン者が 16.0%、流出者が 59.6%で流出者が最も多いことが分かる。また、野田村出身者の中で、75.6%の方が村外への移住を経験していることと、移住者の中で 21.1%のみが帰還していることが分かる。

2013 年に筆者らが行った「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」では、移動性向をうかがっている。その結果、10 代では、定住希望者が 24.3%、移住希望者が 29.7%、一時的な移住後に帰還希望者は 46.0%であった。20 代では、それぞれ 43.8%、32.3%、24.0%となっている。その結果と図 2-3 を比較すると、10 代の定住希望者は移動実態とほぼ一致している。しかし、実際の U ターン者は希望者を大幅に下回っている。20 代については、定住希望者の割合が実態と大きく乖離していることが分かる。また、10 代と同様、帰還希望者が実態より多いのが注目される。帰還希望者や定住希望者が多いにも関わらず、実態としては村外への流出者の割合が高く、Uターン者比率が少ないという厳しい現実がうかがえる。

図 2-3　タイプ別構成比（%）



次に、それぞれのタイプの性別や年齢、学歴などの個人属性別特徴を概観する。表 2-1 は、性別、年齢別、学歴別にタイプを整理したものである。まず性別の特徴を見ると、男性においては定住者が多く、女性においては流出者の割合が高いことが分かる。流出者については、女性が 13.9 ポイント高くなっている。増田（2014）などによると、若年女性の流出は出産可能な人材を失うことになる。その結果、地域の人口再生力が低下し、地域の存続可能性が危うくなると指摘している。その観点からすると村からの女性の流出問題は傍観しできない課題であると言える。

年齢階級別特徴をみると、全ての年齢層で定住者の割合が 25.0%前後で安定していることが分かる。他方、Uターン者については 50 代では 29.4%で他の年齢層より高くなっている。そこには、Uターンの時期と大きくかかわっていることが予想される。後半の分析で詳細に見てみたい。もう一点、注目したい

表 2-1　個人属性別タイプ構成比

（単位：%）

変数	定住者	Uターン者	流出者
男性	31.0	16.1	52.9
女性	17.6	15.5	66.9
18～24歳	21.8	12.0	66.2
25～34歳	23.1	20.5	56.4
35～44歳	26.6	13.9	59.5
45～60歳	23.5	29.4	47.1
高卒	35.6	15.0	49.4
短大・専門学校卒	12.7	23.9	63.4
大学・大学院卒	11.1	9.7	79.2
未婚	29.4	14.1	56.5
既婚	18.1	18.8	63.2

のは 40 代のUターン者が少ない点である。時間の経過とともにUターン者が上昇すると考えると、この年齢層のUターン者が少ないことは何かの特別な事情があったことと推測される。

次に最終学歴別特徴である。まず、野田村の教育機関については、小学校が 1 校、中学校が 1 校、そして高校が 1 校である。また、野田村から通学が可能な久慈市、少し時間はかかるが八戸市まで通うことを考慮すると野田村に住みながら高等教育まで通うことが可能である。最終学歴の分布をみると、高校卒が 52.8%で最も多く、次に短大・専門学校卒が 23.4%、大学・大学院卒が 23.8%でほぼ同数である。タイプ別に分けてみると、定住者が最も多いのは、高卒者で、高卒者の 35.6%が定住者である。他方、流出者が最も多いのは大学・大学院卒者で、79.2%に上る。Uターン者は短大・専門学校卒者が 23.9%で他の学歴者より多くなっている。人的資本の理論によれば、学歴が高くなればなるほど、労働生産性が高く、賃金水準が高くなる。そのため、地域間の賃金格差も高学歴者において格差が大きくなり、移動性向が高くなる。高学歴者に移動者が多く、低学歴者に定住者が多いという結果は、人的資本理論の仮説に合致する。

最後に、婚姻有無について見てみよう。未婚者の内では、29.4%が定住者であるのに対し、既婚者では 18.1%で、未婚者の割合より 11.3 ポイント低くなっていることが分かる。逆に、流出者においては既婚者の割合が高く、タイプによって婚姻状態が異なることが分かる。

３．　移動時期と移動理由

ここでは、移動がどのような時期にどのような理由で行われているのかに注目したい。李（2013）では、北東北からの若者の移動が主に初職時と進学時に行われていることを明らかにしている。また、長野県や宮崎県出身の男性を調査対象とした分析で、江崎ほか（1999，2000）は、U ターンする場合は、就

表 2-2　移動タイプ別年齢構成

（単位：%）

	流出	Uターン
18～24歳	7.38	
25～34歳	75.17	31.58
35～44歳	15.44	34.21
45～60歳	2.01	34.21

職後早い段階で出身町村に帰還していたことを明らかにしている。李ほか（2015）も青森県弘前市の調査結果から、U ターンが 20 代までに完結していることを示した。ここでは、野田中学校出身者の流出時期と帰還時期を見てみたい。

表 2-2 は、流出時の年齢と U ターン時の年齢をまとめたものである。表から野田村からの流出は、主に 18～24 歳までに行われていることが分かる。25 歳以上においては、全体の 2 割未満で、8 割強の移動が 20 代前半までに行われていることが明らかになった。U ターン年齢については、サンプル数が限られた上、無回答者も多く、正確には特定できないが、長野県や宮崎県、そして弘前市で実施した調査結果とは異なり、早い時期での帰還が突出しているような様子は見当たらない。

次に移動の理由を整理してみたい。表 2-3 は流出時の理由をまとめたものである。最も多いのは、進学を理由とした移住で、47.0%が進学で移動している。次に多いのは、自分か配偶者の就職・転職・転勤で、25.9%が仕事を理由に移動している。その次は結婚で、9.0%となっている。その他、持ち家の取得・住環境・通勤の都合が 5.4%となっている。震災以降については、避難所やみなし仮設住宅を理由に移動を選択している者が全体の 10.8%となっている。やはり、移動の理由として目立つのは、進学と就職を理由とした移動で、そのほとんどは 18～24 歳までに行われていることが分かる。

次に、U ターンの理由を見ると、震災前の移動では、自分か配偶者の就職・転職・転勤を挙げた者が、16.3%である。同じく多かったのは親と一緒に住むためとなっている。この結果は、李ほか（2015）の青森県弘前市での調査結果とも一致することで、住まいとしての実家の存在が移動の大きな理由となっていることが分かる。ここから移住促進政策においては当たり前の結論なのかもしれないが、仕事と住まいの確保が決め手となっていることが確認されたと言える。震災以降においては、避難所やみなし仮設の存在が帰還の理由となっていることがうかがえる。震災は一時的な帰還の理由であったかも知れないが、帰還のきっかけになったと言える。

表 2-3　移動タイプ別移動理由

（単位：%）

	流出	Uターン
進学	46.99	
自分か配偶者の就職・転職・転勤	25.90	16.28
結婚	9.04	2.33
親と一緒（近く）に住むため	0.60	16.28
子と一緒（近く）に住むため	0.60	
持家取得、住環境・通勤の都合	5.42	2.33
その他	0.60	2.33
避難所	2.41	39.53
みなし仮設住宅	8.43	2.33
親戚・知人宅		13.95
震災前とは異なる住宅		2.33
その他		2.33

４．　タイプ別生活実態

ここでは、定住者、U ターン者、流出者がそれぞれどのような生活を送っているのかを雇用状況と所得の面で比較してみたい。住まいの選択はわれわれの生活の中で大変重要な選択行動となる。それには、引っ越し費用や交通費などの金銭的な費用だけでなく、今まで付き合いのあった仲間との別れを伴う場合もあり、精神的な面においても大きな負担を強いられる。しかし、そのような費用が伴っても移動先での経済的な便益が大きければ、移動を選択することが合理的な選択となる場合もある。そこで、移動が本当に経済的な便益をもたらしているのかを検討してみたい。

表 2-4 は、現在在学中の学生を除いて、タイプ別の就業状況を雇用形態別に整理したものである。正規

表 2-4　タイプ別雇用状況

（単位：%）

	定住者	Uターン者	流出者
正規雇用者	58.49	53.66	54.81
非正規雇用者	22.64	34.15	22.12
自営業者	9.43	7.32	7.69
無業者	9.43	4.88	15.38

表 2-5　タイプ別年収分布

（単位：万円）

タイプ	N	下位10%	下位25%	中央値	上位25%	上位10%	平均値	標準偏差
定住者	58	150.0	250.0	350.0	500.0	700.0	399.1	232.2
Uターン者	46	150.0	250.0	350.0	700.0	900.0	468.5	289.1
流出者	151	150.0	250.0	500.0	500.0	700.0	442.4	242.2

雇用者の割合や非正規雇用者の割合にタイプ間に大きな差が見当たらないことが分かる。ただ、無業者の割合には、村外流出者にその割合が少し多く見られる。しかし、カイ二乗検定の結果、統計的な有意な差は見られず、雇用状況においてはタイプ間の差が見られないことが確認できた。

次に、各タイプ別の個人の収入も含めた同居している家族全体の年収の水準を比較してみたい。表 2-5 は、各タイプ別の年収を整理したものである。まず、平均値に注目すると、U ターン者の平均値が 468.5 万円で最も高い。次は流出者で 442.4 万円、そして定住者の 399.1 万円となっている。そして、差がどの階層で発生しているかを見ると、所得を高い順に並べてちょうど真ん中にあたる中央値で、流出者の値が 500 万円となっており、最も高くなっている。そして上位 25%水準では U ターン者の所得が 700 万円で他のタイプより高くなっている。つまり、U ターン者の所得の高さは高所得層の所得が引き上げていることが分かる。ここで注目してほしいことは、下位層においてはタイプ間の差が見られない点である。この結果は、李（2012）でも指摘しているように、下位所得層においては移動に伴う経済的な便益はほとんど期待できない。前述したように移動には金銭的な費用や精神的な費用が伴う。「なんとなく」や「憧れ」だけで移動を選択することは、経済的には非合理的な行動であることを指摘しておきたい。

５．　移動者の特徴　―多項ロジット回帰分析―

以上のように、各タイプ別の個人属性と現在の生活実態について記述統計を用いて概観した。ここでは、多項ロジット回帰分析の手法を用いて分析を行う。分析では、定住者を基準カテゴリーとした「タイプ」を被説明変数とした。説明変数には、個人属性の変数として、女性ダミー、年齢ダミー（30 歳未満を基準）、学歴ダミー（高卒を基準）、既婚ダミー、子供ダミー（有るを基準）、世帯人数を用いた。そして、経済状況を表す変数として仕事ダミー（正社員が基準）と対数変換した世帯年収を使用した。

推定結果が表 2-6 である。個人属性の特徴として、女性ダミーが正で有意、年齢ダミーが負で有意となっている。つまり、女性であるほど、U ターン者や流出者になりやすく、移動を選択する確率が高いこと

表 2-6　移動者の特徴の推定結果

変数	Uターン者		流出者	
	係数	標準偏差	係数	標準偏差
女性ダミー	0.8209	0.44 *	0.8130	0.44 *
25～34才ダミー	-0.5690	0.81	-1.3643	0.75 *
35～44才ダミー	-1.2145	0.74	-1.4719	0.66 **
45~60才ダミー	-1.1450	0.90	-2.9502	0.88 ***
短大・専門ダミー	1.5254	0.64 **	1.7295	0.63 **
大学・大学院卒ダミー	0.5531	0.71	1.2748	0.60 **
既婚ダミー	1.2173	0.84	1.9713	0.78
子供ありダミー	0.5836	0.82	0.9821	0.75
世帯人数	-0.6910	0.21 ***	-1.3983	0.21 ***
非正規ダミー	0.8483	0.63	0.8758	0.61
自営ダミー	0.2225	0.89	0.2508	0.82
無営ダミー	-0.7349	1.30	0.9998	0.89
対数変換した世帯年収	0.3298	0.41	0.9771	0.39 **
定数項	-0.7652	2.30	-1.7886	2.20
サンプルサイズ	239			
疑似決定係数	0.2573			

注：*は10％水準，**は5％水準，***は1％水準で有意であることを意味する。

が分かる。年齢については、流出者においては負となっており、若年者ほど流出する確率が高いことが分かる。次に教育水準においては、短大・専門学校卒ダミーが U ターン者と流出者で正で有意、大学・大学院卒ダミーは流出者のみで正で有意となっている。これは高学歴者ほど移住を選択する確率が高く、大学・大学院卒者の場合は流出する確率が高いことを示している。

既婚ダミーは、流出者において正で有意となっており、流出後に結婚したのか、結婚のために流出したのかの因果関係は特定できないが、既婚者において流出を選択する確率が高いことが分かる。仕事においては、有意な変数は見当たらない。ただ、対数変換した世帯年収は、流出者において正で有意となっており、高所得者ほど流出する確率が高いことが分かる。一般的に日本においては学歴と所得が比例するので、学歴ダミー変数の結果と一致していると言える。

総合すると、流出を選択する確率が高い者は、女性、若者、高学歴者、既婚者、高所得者であることが明らかになった。今後より豊かな村づくりを進めるためには、このような野田村出身者が喜んで帰還できる環境を整備することが求められる。

６．　生活満足度

前節で雇用状況と所得水準を比較してみた。しかし、住まいの選択には仕事や所得だけでなく、住む

表 2-7　タイプ別生活満足度

タイプ	今の人間関係に		今の家計の状態に		今の家庭生活に		ご自分の仕事に		幸福度	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
定住者	3.12	0.90	2.72	0.89	2.99	0.93	2.86	1.02	5.60	2.25
Uターン者	3.35	0.74	2.70	1.09	3.39	1.04	3.20	1.01	5.61	2.35
流出者	3.41	0.89	2.81	0.98	3.35	0.96	3.19	1.03	6.29	1.96

地域からさまざまな満足度が影響する。居住している地域の自然環境や近隣住民とのお付き合いに満足を感じる場合もある。あるいは、文化的な生活や利便性などについて満足を感じる場合もある。各個人が感じる満足度はそれぞれの観点によって異なる。そこで、各個人の観点を少し網羅的な概念で比較してみたい。

まず、日常の生活を、「今の人間関係に」、「今の家計の状態に」、「今の家庭生活」、「ご自分の仕事に」の四つの項目について、どの程度満足しているのかを比較してみたい。回答は、「たいへん満足」を 5 点、「たいへん不満」を 1 点で評価し、5 段階に数値化した。表 2-7 はタイプに平均値と標準偏差を整理したものである。

「今の人間関係」について見ると、流出者の満足度の平均値が 3.41 で最も高く、U ターン者 3.35、定住者 3.12 の順になっている。意外なことに定住者の人間関係への満足度が一番低くなっている。その背景には固定的な人間関係から来る閉塞感などが影響していると思われる。「今の家計の状態に」について見ると、こちらも流出者が最も高く、定住者が最も低くなっている。次に、「今の家庭生活」の項目は、U ターン者の平均値が 3.39 で一番高く、流出者 3.35、定住者 2.99 の順になっている。この点は李ほか（2015）の弘前市における調査結果とも一致しており、U ターン者のワークライフバランスが最も良好であることは、定住の可能性を高める条件となりうる。最後に「ご自分の仕事に」に対する満足度では、U ターン者の満足度が 3.20 で一番高く、流出者 3.19、定住者 2.86 の順になっている。前述した収入の結果とも一致しており、所得の高さが満足度にも反映されていると言える。

各項目の生活満足度が総合的な幸福度にどのように反映されているのかを見てみたい。主観的な幸福度は、「現在、あなたはどの程度幸せですか」という問いに、「とても幸せ」を 10 点、「とても不幸」を 0 点で回答していただいた。結果を見ると、流出者が 6.29 で最も高く、U ターン者 5.61、定住者 5.60 の順になっており、定住者の幸福度が一番低くなっている。これからの流出を食い止めるためには、定住者の幸福度を高めることが求められる。

最後に、幸福度を被説明変数とし、被説明変数には前節で用いた個人属性と経済状況を表す変数、そして、定住者を基準とするタイプダミー変数で用いて回帰分析を行う。回帰分析は被説明変数と説明変数間の関係性を確認できる有効な手段である。

表 2-8 は分析結果である。結果から 40 代ダミー変数が負で有意となっており、40 代の幸福度が基準

表 2-8　幸福度の決定要因

変数	係数	標準偏差
女性ダミー	0.0095	0.01
25～34才ダミー	-0.4995	0.43
35～44才ダミー	-0.8047	0.40 **
45~60才ダミー	-0.8575	0.54
短大・専門ダミー	0.6804	0.34 **
大学・大学院卒ダミー	0.5591	0.36
既婚ダミー	1.0742	0.42 **
子供ありダミー	0.8480	0.43 **
世帯人数	-0.0243	0.13
非正規ダミー	-0.5863	0.38
自営ダミー	-0.4669	0.57
無営ダミー	-0.3552	0.57
対数変換した世帯年収	0.3299	0.25
Uターン者ダミー	-0.4765	0.44
流出者ダミー	0.1131	0.40
定数項	3.5220	1.42 **
サンプルサイズ	237	
自由度修正済決定係数	0.1312	

注：*は10％水準，**は5％水準，***は1％水準で有意であることを意味する。

である 20 代と比較して低いことが分かる。短大・専門学校卒ダミー変数が正で有意となっており、高卒者より幸福度が高い。次に有意なのは、既婚ダミーと子供ありダミーである。家族を持つことが幸福度を高める最大の要因であることがこの結果からうかがえる。また、移動タイプの変数については、有意な結果が得られず、個人属性と経済状況を統制すれば、移動によって満足度が高くなることはないことをこの結果は示唆している。

要約すると、流出者は既婚率が多く、子供を持っているために、幸福度が高くなっている。逆に言えば、住む場所に関わらず家族に恵まれていれば、十分幸せな生活を送ることが出来ることを示していると言える。

7　まとめ

本章では、野田中学校出身者が何時、どのような理由で、移動しているのか、そして移動者にはどのような特徴があるのかを検討した。その結果、野田村からの流出は 20 代前半までに、進学や就職を主な理由として行われていることが分かった。逆に、流出者の帰還については、若者に限らず全ての年齢層で帰還が行われていることが分かった。しかし、帰還者の割合は流出者の 2 割に満たず、呼び戻しが十分でないことが明らかになった。そして、流出者の特徴としては、女性、若年者、高学歴者、高所得者が多く、

毎日の生活における満足度も高い。

ただし、最後に行った幸福度の分析では、タイプ間の有意な差は認められず、幸福度の差が結婚有無か、子供の有無に大きく左右されていることが分かった。つまり、幸福度を決めるのはどこに住んでいるのかではなく、家族と一緒に生活しているか否かに大きく依存していることが分かった。

今後の村づくりにおいてのヒントとしては、流出を抑制するためには女性や若者を中心においた村づくりを考える必要があると言える。もう一点は、村民の幸福度を高めるためには、既婚者や子育て世代にやさしい村づくりが求められていることを思われる。最後に、村への呼び込み・呼び戻しのためには高学歴者向けの仕事づくりや場づくりが必要であると言える。

【参考文献】

江崎雄治・荒井良雄・川口太郎（1999）「人口還流現象の実態とその要因－長野県出身男性を例に－」『地理学評論』72A-10，pp.645-667

江崎雄治・荒井良雄・川口太郎（2000）「地方圏出身者の還流移動－長野県および宮崎県出身者の事例－」『人文地理』52-2，pp.190-203

河村信治（2015）「出稼ぎ大工と『ものづくり』の文化」『東日本大震災からの復興(2)　がんばるのだ―岩手県九戸郡野田村の地域力―』李永俊・渥美公秀（監修）弘前大学出版会，pp72-97

増田寛也編著（2014）『地方消滅―東京一極集中が招く人口急減』中公新書

李永俊（2012）「地域間移動から若者が得る経済的な利益」石黒ほか『「東京」に出る若者たち－仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房，pp. 47-90

李永俊・他（2013）『野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書』弘前大学人文学部

李永俊・他（2015）「中南津軽地域住民の仕事と生活に関する調査報告書」，弘前大学地域未来創生センター

第 3 章　震災と移動

李　永俊

本章では、調査結果を用いて震災以前と以降の移動の実態を比較することによって、震災が人々の住まいの選択にどのような影響を与えているのかを検討してみたい。

杉浦・李（2013）、Lee and Sugiura（2014, 2017）では、2013 年に実施した「野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」の結果を用いて、災害が地域間移動の選択に及ぼした影響について注目される結果を示している。震災による住居や家財への直接的な被害は、移動性向に明確な影響を与えていないが、震災により転職・転業などを強いられた場合は村外への移動性向が高まることを明らかにした。また、出身地であることや、住宅の所有権を有している場合は移動性向が弱くなることも分かった。そして、震災による被害の内、物的な被害より人的ネットワークの損失が移動性向を高める要因であることも明確になった。この結果は復興政策を考える上で、コミュニティの再生がいかに重要なのかを含意している。

上記の結果は、「これからもずっと、野田村にお住まいになりたいと思いますか」の問いに対する意向、つまり移動性向を分析した結果であった。ここでは、震災から 6 年が経過した調査時点での移動実態を分析し、震災が住まいの選択行動に与えた影響について明らかにしたい。また、2013 年の意向調査の結果と比較を行い、意向と実際がどのように異なっているのかについても概観したい。

1　震災以前と以降の移動実態比較

震災以前と以降の移動実態を概観する。表 3-1 は、震災以前の移動と以降の移動に分けて、タイプ別に整理したものである。震災以降は、震災時点で野田村に住んでいた住民に限って、震災以降の移動結果をタイプ別に区分したものである。

定住者に注目すると震災以前が 46.6%であったのに対し、震災以降が 52.0%で 5.4 ポイント高くなっていることが分かる。そして、流出者も震災以前が 35.5%であったのに対し、震災以降は 42.4%で震災以降の割合が高くなっている。逆に、U ターン者においては震災以前が 17.9%であったのに対し、震災以降が 5.7%で 12.2 ポイント震災以前が多くなっている。震災以降は震災以前と比較して、定住者、流出者が多く、逆に U ターン者が少なくなっている。

この結果は次のように解釈される。まず、U ターン者の割合が少ない点については、移動後に十分な時間が経過していないことが大きく影響していると思われる。前節でも述べたように、野田村の U ターン者の場合は他地域と異なり、流出後早い時期に帰還する割合は多くない。そのため、U ターン者が一定数増えていくためには時間の経過が必要であると思われる。

次に注目される結果は、U ターン者を含む移動者の割合が少なく、定住者の割合が高まったことである。その理由としては、少なからず震災の影響で、定住希望者が増えたのではないかと思われる。杉

表 3-1　震災以前と以降の移動実態比較

（単位：%）

	震災以前	震災以降
定住者	46.6	52.0
Uターン者	17.9	5.7
流出者	35.5	42.4
合計	100.0	100.0
（人数）	307	177

浦・李（2013）がまとめた震災から 2 年後の調査結果では、野田村に住み続けたい希望者が 8 割を超えていた。震災以前の調査結果はないので、震災以前と以降を直接的に比較することは不可能である。ただ、第 2 章の図 2-2 でも述べたように、野田村からの転出者数は継続して低下傾向にある。震災の年である 2011 年に一時的に増加したが、3 年後の 2014 年には震災以前の水準に戻っており、それ以降も低下傾向で推移している。その背景には、震災だけでなく、少子化や復興特需による雇用の拡大なども影響していると思われるが、震災による家族意識や地域意識の変化も少なからず影響しているのではないかと考えられる。

2　震災による住まいと仕事への影響と移動

ここでは、震災による物的被害や人的ネットワークの被害、仕事や収入などの変化が震災以降の住まいの選択にどのような変化をもたらしたのかを見てみたい。

表 3-2 は、「住まいに被害がありましたか」の質問に対して、「被害はなかった」と一部被害から全壊までの「被害が有った」に分けて、タイプ別に整理したものである。被害はなかったグループでは、定住者の割合が 57.5%であるのに対し、被害が有ったグループでは 41.8%で、定住者の割合が大きく異なることが分かる。一方、流出者では被害が有ったグループが、なかったグループを 13.4 ポイント多くなっており、住まいの被害が流出の一因になっていることがうかがえる。

次に、仕事への被害との関係を見てみたい。ここでは、「あなたの主なご職業は、震災で変化しましたか」の問いに対して、「震災前と同じ仕事をしている」「震災前も今も働いていない」を変化がないグループに、「震災が原因で無職になった」「震災をきっかけに職についた」「震災をきかっけに転職・転業した」を変化があったグループに分けて、タイプ別にまとめた。表から分かるように、二つのグループ間で大きな差がないことが分かる。カイ二乗検定においても、有意な差が見られず、震災による仕事の変化と住まいの選択との関係は確認できなかった。

収入面での変化を見てみたい。ここでは、「震災前と現在で収入、支出、貯金額は増えましたか、減りましたか」の問いに対して、「増えた」「変わらない」を経済被害がなかったグループに、「減った」と回答した者を「経済被害が有ったグループ」に分けて分析する。収入面においては、収入が減ったグループに定住者が多く、収入が増えたグループに流出者が多いことが興味深い。ただ、カイ二乗検定に

表 3-2　住まいと仕事の被害と移動

（単位：%）

	住まいの被害		仕事上の被害	
	あり	なし	あり	なし
定住者	41.8	57.5	66.7	72.3
Uターン者	7.3	5.0	11.1	6.2
流出者	50.9	37.5	22.2	21.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
（人数）	55	120	27	65

表 3-3　収入の変化と移動

（単位：%）

	収入		支出		貯金	
	変わらない 増えた	減った	変わらない 増えた	減った	変わらない 増えた	減った
定住者	58.5	67.7	58.0	83.3	57.0	64.4
Uターン者	7.6	6.5	7.9	0.0	7.0	6.7
流出者	34.0	25.8	34.1	16.7	36.1	28.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
（人数）	106	31	126	6	86	45

おいては、有意な差がなく、経済的な変化と移動との関係が弱いことが分かる。

3　震災による人的ネットワークの変化と移動

ここでは、震災による人的ネットワークの変化と住まいの選択行動との関係について見てみたい。Lee and Sugiura(2017)では、震災以降の人的ネットワークの損失が移動性向を高めていることを明らかにしている。本章では、移動性向ではなく、実際の移動選択への影響を明らかにしたい。

「震災の前後で、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々とのお付き合いは増えましたか、減りましたか」の質問に対して、「変わらない」「増えた」を被害がなかったグループに、「減った」を被害が有ったグループに分けて分析した。表 3-4 がその結果をまとめたものである。

まず、家族・親せきについては、被害がなかったグループで、定住者が 54.3%であるのに対し、被害が有ったグループでは定住者が 23.1%で両者に間に大きな差があることが分かる。逆に流出者は被害が有ったグループで多いことが分かる。また、カイ二乗検定においても、10%水準で有意となっており、両グループ間で差があったことが分かる。地域の仲間についてみても、被害がなかったグループに定住者が多い。統計的な検定においても、１%で有意となっており、家族・親せきや地域仲間という人的ネットワークが住まいの選択に影響を与えていることが分かる。

表 3-4　人的ネットワークの変化と移動

（単位：%）

	家族・親せき		地域の仲間		仕事の仲間		村外の人々	
	変わらない 増えた	減った	変わらない 増えた	減った	変わらない 増えた	減った	変わらない 増えた	減った
定住者	54.3	23.1	55.9	36.7	52.6	70.0	51.6	66.7
Uターン者	4.9	15.4	2.8	20.0	5.1	10.0	5.1	16.7
流出者	40.7	61.5	41.4	43.3	42.3	20.0	43.3	16.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
（人数）	162	13	145	30	156	10	157	12

しかし、仕事の仲間については、両グループ間で差が見られず、仕事の仲間における人的ネットワークの変化と移動との関係が弱いことが分かる。最後に村外の人々との関係においては、「変わらない」「増えた」と回答したグループに、流出者が多く、減ったと回答したグループに定住者が多い。

ここで注意しなければならないのは、因果関係についてである。上述した結果は、被害有無のグループにおいて、移動タイプの差があるという結果であり、被害が有ったから移動を選択したという因果関係を示しているわけではないということである。具体的には、村外の人々との関係が増えたから、移動を選択したのか、村外に移動したために村外の人々との関係が増えたのかは特定できないということである。ただ、因果関係は特定できないが、両者の間に正の相関関係が見られることは分かる。

4　震災前後の移動理由の違い

上述したように、震災による住まいや人的ネットワークなどの被害有無は移動の選択において大きな影響を与えている可能性が高い。そこで、ここでは震災前後の移動者の移動理由を見てみたい。表 3-5 は、震災以前と以降に分けて移動理由を整理したいものである。

震災以前においては、最も多いのは、進学で移動した者で 52.7%である。その次は、自分か配偶者の就職・転職・転勤であり、29.1%である。そして、結婚が 10.1%となっている。震災以降においては、回

表 3-5　震災以前と以降の移動理由の比較

（単位：%）

	震災以前	震災以降
進学	52.7	47.7
自分か配偶者の就職・転職・転勤	29.1	9.1
結婚	10.1	4.6
親と一緒（近く）に住むため	0.7	
子と一緒（近く）に住むため	0.7	
持家取得、住環境・通勤の都合	6.1	
その他	0.7	
避難所		9.1
みなし仮設住宅		29.6

答が少なく、はっきりとしたことは言えないが、震災以前と同様に進学が最も多く、その次は、みなし仮設 29.6%となっていることが分かる。また、避難所と答えた者の、9.1%となっており、住まいの被害によって移住を選択せざるを得なかった者が、約 4 割に上っていることが分かる。震災直後の流出を食い止めるために、避難所の設営や仮設住宅の提供がいかに重要なのかをこの結果は示唆している。

5　被害有無と移動との関係

ここでは、震災による被害の有無が住まいの選択にどのような影響を与えたのかをロジット分析を用いて明らかにする。分析では、移動の有無によって、定住者と U ターン者・流出者に区分して、被説明変数として用いた。被説明変数は、定住者を 0 、U ターン者・流出者を 1 とするダミー変数を用いた。説明変数には、住まいの被害、仲間の被害、仕事への被害、収入への被害を表すダミー変数を用いた。被害が有った場合は 1 、被害がなかった場合は 0 である。

ロジット分析の結果が、表 3-6 である。表から有意な結果が得られたのは、住まいの被害と地域の仲間の被害である。住まいの被害は、係数が正で、被害が有った方が流出する確率が高いことが分かる。次に地域の仲間のダミー変数は係数が負で有意である。つまり、地域の仲間が減少した場合は流出を選択する可能性が高いことが分かる。以上の結果は、Lee and Sugiura(2017)の結果と一致している。この結果は、大きな災害に見舞われた被災地から人口の流出を防ぐためには、住まいの確保と地域仲間の人的ネットワークが非常に重要であることを示唆している。

特に、野田村のような小規模被災地では、人口の増減は災害からの復旧・復興のために何より重要な地域資源となる。小規模地域が大きな災害から地域を守り抜くためには、災害に強い住まいづくりや、万が一被害が発生した場合は、速やかに避難所や仮住まいを確保することが重要であることが分かる。また、被災発生後に地域住民により安心感を与えるためには、平時における避難所設営訓練や、仮住まいに対する地域住民間の共同意識作りなどが必要である。災害からの地域回復力を事前に高めておくことが重要であると言える。

表 3-6　震災と移動に関するロジット分析

変数	係数	標準偏差
住まい被害ダミー（ref: 被害なし）	0.9603	0.56 *
人的ネットワーク変化ダミー（ref: 減った）		
家族・親せき被害ダミー	-0.2220	1.29
地域の仲間被害ダミー	-1.4868	0.88 *
仕事の仲間被害ダミー	1.6670	1.43
村外の人々被害ダミー	1.2772	1.26
仕事上の被害ダミー（ref: 変化なし）	0.3886	0.57
収入被害ダミー（ref: 減った）	-0.1786	0.63
定数項	-2.6612	1.63
サンプルサイズ	86	
類似決定係数	0.1217	

注：*は10%水準，**は5%水準，***は1%水準で有意であることを意味する。

表 3-7　実際に戻る予定の有無

（単位：%）

具体的に戻る計画を立てている	1.7（3）
将来的に戻る予定	13.2（24）
戻るかどうかわからない	44.5（81）
戻る予定はない	40.7（74）
合計	100.0（182）

注）括弧内は人数である。

また、地域の仲間は災害発生直後の助け合いの源泉であり、その後の地域づくりにおいても地域を守る原動力となる。ただ、そのような関係は災害発生後に突然できるものではない、平時における地域コミュニティづくりが災害時の力となることを上記結果は示唆している。

6　被害有無と今後の U ターンの可能性

最後に、ここでは現在村外に住んでいる野田中学校出身者の U ターンの可能性を検討してみたい。表 3-7 は、現在、「野田村」以外に住んでいる村民に「実際に野田村に戻る予定はありますか」と尋ねた結果である。表から具体的に戻る計画を立てている者は 1.7%、将来的に戻る予定は 13.2%で、戻る可能性がある村民がわずか 14.9%に過ぎないことが分かる。今回の調査で、実際の U ターン者の割合が、16.0%であったので、U ターン希望と実際 U ターン者がほぼ一致していると言える。

U ターンの時期についての主な回答は、「自分または配偶者が、野田村に仕事をみつけたら」が最も多く、その次は「具体的にはわからない」だった。3 番目に多かったのは「親・義親の健康に不安が生じたら」であった。家族の介護の必要性が U ターンのきっかけになっていることが分かる。

次に、震災による被害の有無や現在の野田村との関わりが、U ターンの希望とどのように関係しているのかを見るために、回帰分析を行う。ここでは、「あなたはいつかは野田村に戻りたいと思っていますか」の問いに対して「戻りたい」を 5 点、「戻りたくない」を 0 点にした U ターン希望を被説明変とした。説明変数には、震災の被害の有無を示す住まいの被害、人的ネットワークの被害、仕事の被害、収入の被害有無をダミー変数で用いた。また、現在の野田村とのかかわりの変数として、野田村に帰る頻度と、あなたが野田村に戻ることを期待している人はいるか否かのダミー変数を用いた。野田村に帰る頻度は、月 1 回以上を 3 点、2～4 ヶ月に 1 回程度を 2 点、年に 1～2 回・数年に 1 回を 1 点、ほとんど帰らない、まったく帰らないを 0 点にした。最小二乗法で推定した結果が表 3-8 である。

推定結果から興味深いのは、地域の仲間の係数が負で、有意である点である。また、野田村に戻ることを期待している人の有無が、正で強く効いている。つまり、家族や親せき、あるいは地域の仲間の存在が U ターンの希望を強めていることが分かる。人的ネットワークが地域に人を呼び戻す最大の吸引力とな

表 3-8　帰村の可能性に関する回帰分析結果

変数	係数	標準偏差
住まい被害ダミー（ref: 被害なし）	0.4043	0.38
人的ネットワーク変化ダミー（ref: 減った）		
家族・親せき被害ダミー	0.2589	0.69
地域の仲間被害ダミー	-1.3790	0.66 **
仕事の仲間被害ダミー	0.8286	0.98
村外の人々被害ダミー	0.2685	0.89
仕事上の被害ダミー（ref: 変化なし）	-0.9019	0.49 *
収入被害ダミー（ref: 減った）	0.1506	0.40
帰る頻度	0.1861	0.18
戻ることを期待している人有無（ref: なし）	1.6314	0.35 ***
定数項	1.6358	1.02
サンプルサイズ	88	
自由度修正済決定係数	0.2395	

注：*は10%水準，**は5%水準，***は1%水準で有意であることを意味する。

っていることがよく分かる。

7　まとめ

本章では、調査結果を用いて、震災による被害の有無が住まいの選択にどのような影響を与えているのかを検証した。分析の結果、住まいの被害は被災地住民にとっては住まいの選択に大きな影響を及ぼしていたことが分かった。また、地域の仲間の損失が流出の確率を高めることも明らかになった。

以上の結果から、小規模地域において大きな災害から地域を守り抜くためには、災害に強い住まいづくりと、万が一の場合は速やかに避難所や仮住まいを確保することが重要であることが分かった。また、平時からの地域コミュニティづくりが災害に強い地域づくりにつながることを本章の結果は含意している。今後の地域づくりには、流出した人材の呼び戻しが欠かせない。その呼び戻しにおいても、家族や親せき、あるいは地域の仲間の人的ネットワークが最大の吸引力となりうることを本章の結果は示唆している。

参考文献

杉浦裕晃・李永俊（2013）「移動性向の決定要因と災害の影響について」『野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書』弘前大学人文学部、pp.21~42。

Lee.Y-J and Sugiura, H.（2017）”Stay or Relocate: The Roles of Networks After The Great East Japan Earthquake”, *Social Network Analysis of Disaster Response, Recovery, and Adaptation* Edited by Eric C. Jones and A. J. Faas, pp. 223~238.

第４章　震災７年目の生活復興感

永田　素彦

東日本大震災津波から７年が経とうとしている。野田村では、その間、高台団地が造成され災害公営住宅が整備されるなど住宅の再建がすすみ、ほぼすべての被災住民が新たな住居での生活をスタートさせている。このようにハード面での復興が進んでいる中、人々は自身の生活復興がどの程度進んだと感じているだろうか。震災を契機に、自身の生活がどのように変化したと感じているだろうか。そうした変化をもたらしているのはどのような事柄だろうか。この章ではこれらの問いに答えていく。

以下、第１節では、野田村の人々の生活復興感（自身の生活、および、野田村の復興がどの程度進んでいると思うか）を明らかにする。さらに、生活復興感の高低と関連の強い項目を探る。第 2 節では、震災前の生活と現在の生活の変化、および、現在の生活の満足度を明らかにする。第３節では、生活復興パターンを、震災前後の生活の変化から３つのパターンに分類し、そのパターンと関連の強い事項を探る。

なお、以下の分析は、震災発生時に野田村に在住していた 177 名（女性 76 名、男性 99 名、性別無回答２名）の回答に基づいている。

１．生活復興感とその規定因

震災 7 年目、野田村の人々は自身の生活復興がどの程度進んでいると感じているだろうか。「あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」という質問への回答は、「ほぼ復興した」が 72.3%、「半分以上復興した」が 13%、「やや進んでいる」が 9.6%、「まったく進んでいない」が 2.8%だった（図 4-1）。2013 年の調査結果（それぞれ、41.1%、13.9%、28.3%、8.9%）と比べると、全体として生活の復興はかなり進んでいると感じられているものの、現在でも「まったく進んでいない」

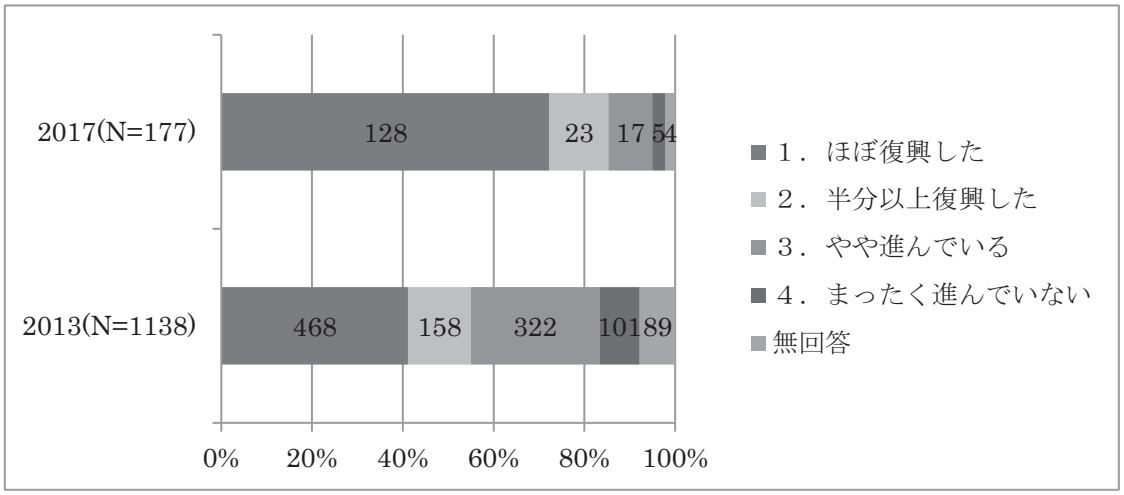


図 4-1　自分の生活の復興がどれくらい進んでいるか：2017 年と 2013 年の比較

と感じている人が存在することには留意する必要がある。

また、「あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」への回答は、「ほぼ復興した」が 19.2%、「半分以上復興した」が 47.5%、「やや進んでいる」が 30.5%、「まったく進んでいない」が 2.3%だった（図 4-2）。2013 年調査（それぞれ、1%、7.6%、78.3%、10.5%）と比べると、野田村の復興も進んでいると感じられているものの、まだまだ十分復興しているとはみなされていないようである。

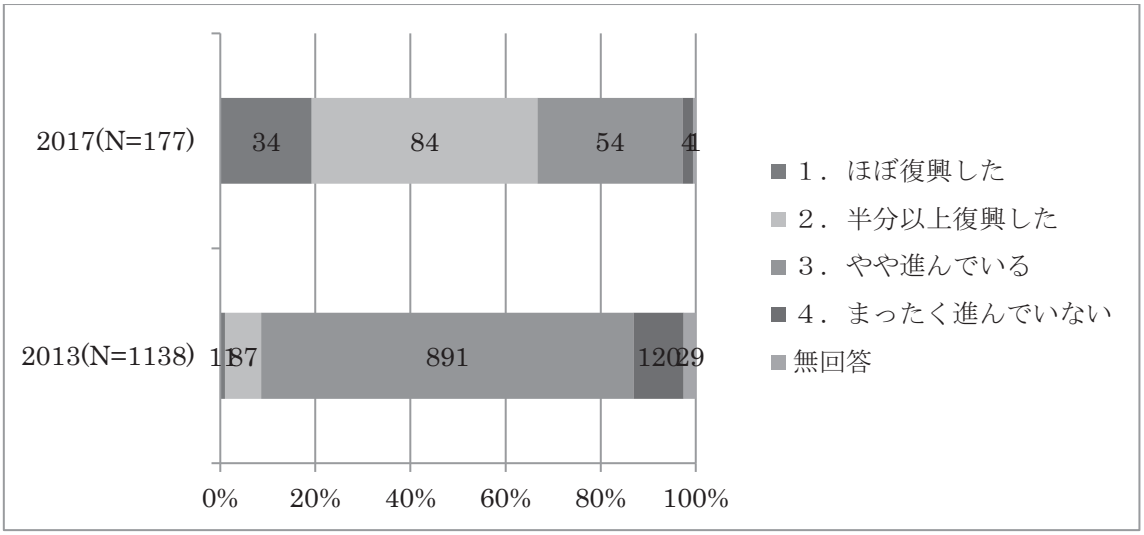


図 4-2　野田村の復興がどれくらい進んでいるか：2017 年と 2013 年の比較

では、現在の生活復興感および野田村復興感と関連の強い項目はどのようなものだろうか。このことを明らかにするために、生活復興感および野田村復興感をそれぞれ目的変数として、AIC（赤池情報量基準）による分析を行なった。説明変数には、ほぼすべての質問項目を用いた。（なお、AIC の値が低いほど、その説明変数は目的変数と強く関連している。また、AIC 値が正の場合には、関連があるとはいえない。）その結果、生活復興感と野田村復興感は相互に強く関連していた。具体的には、両者の関連性の強さを示す AIC 値は-31.12 であった。すなわち、生活復興が進んでいると感じている人は、野田村の復興も進んでいると感じる傾向がみられた。

生活復興感と関連の強い項目（AIC 値が-1 以下である項目）は、野田村復興感を除くと、震災から 6 年がたって「自分だけが頼りという気持ちが増した」という項目（AIC 値は-2.81；「あてはまらない」人の方が生活復興感が強い）と、「被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた」という項目（AIC 値は-1.05）だった。一方、野田村復興感と関連が強かったのは、震災から 6 年がたって「行政への頼もしさが増した」という項目（AIC 値は-5.08）だった。

なお、2013 年の調査では、住宅の被害の程度、世帯収入と震災前後の収入・支出・貯金額の変化、震災前の勤め先の復旧状況、オカネや住宅のことを相談できる知り合いが村内にいるかどうか、地域の仲間や村外の人々との付き合いの変化（増減）などが、生活復興感と強く関連していたが、今回の調査では関連はみられなかった。また、震災前と現在の生活の変化、現在の生活の満足度も、生活復興感とは関連していなかった。

２．震災をきっかけとした生活の変化と現在の生活満足度

今回の調査では、阪神・淡路大震災の被災地を対象に実施された調査を参考にして、①震災から 6 年の間に生じた人と人のつながりの変化、②震災前と現在の生活の変化、③現在の生活の満足度を尋ねた。本節ではその結果を報告する。

（1）「震災から 6 年がたちましたが、その間、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに○をしてください」という質問への回答を以下に示す（図 4-3）。

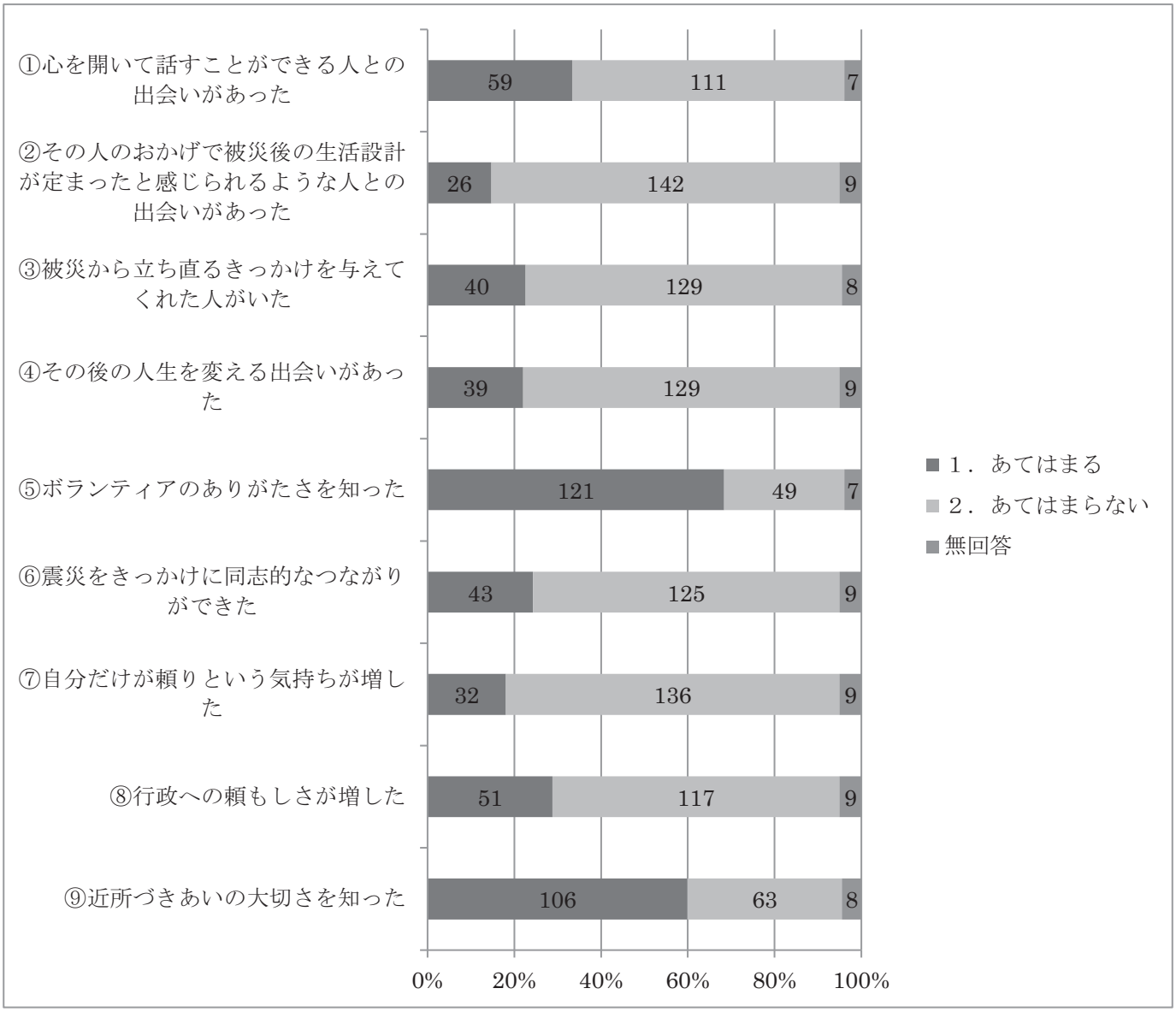


図 4-3　震災後の他者とのつながりの変化

上のグラフをみると、まず、約 6 割の人々が、⑤ボランティアのありがたさや、⑨近所づきあいの大切さを知ったと回答している。⑧行政への頼もしさが増したという人も 3 割近く存在する。また、概ね 2 割前後の人々が、震災後に何らかの意味での重要他者との出会い①②③④を経験している。一方で、

自分だけが頼りだという気持ちが増したという人も 2 割程度存在している。このように、行政、ボランティア、近所の人々に感じる頼もしさが増したり、重要他者との出会いがあった人が、ある程度存在していることがわかる。ただし、前節の AIC 分析で述べたことを除けば、生活復興感にはこれらの項目の違いによる明確な差は見られなかった。

（2）「あなたは、現在（平成 29 年 8 月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に○をつけてください」という質問への回答を以下に示す（図 4-4）。

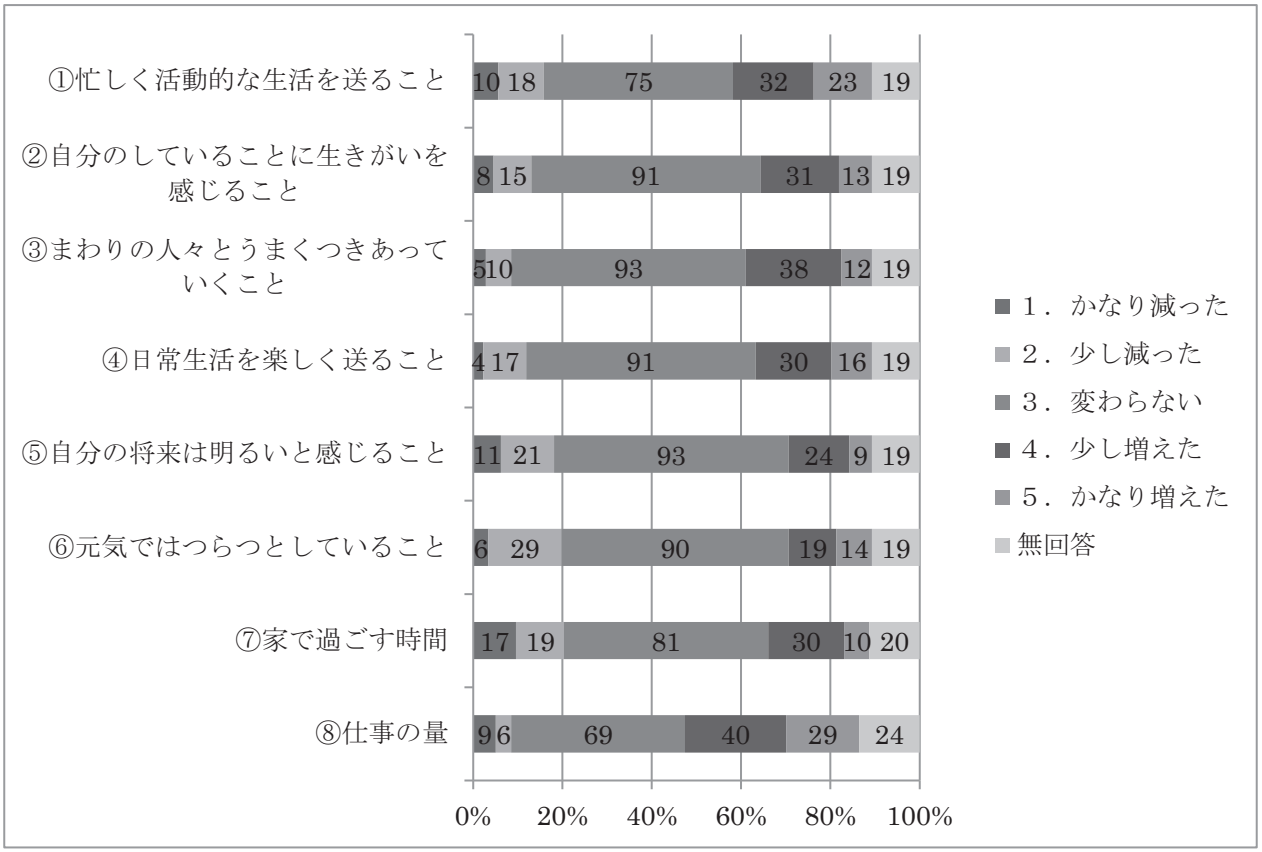


図 4-4　震災前後の生活の変化

それぞれの項目について、震災の前と後で「変わらない」と回答している人がおおよそ半分を占める。「かなり増えた」または「少し増えた」の割合が比較的多い項目は、順に、⑧仕事の量、①忙しく活動的な生活をおくること、③まわりの人々とうまくつきあっていくこと、④日常生活を楽しく送ること、②自分のしていることに生きがいを感じること、などとなっており、震災前と比べてさまざまな側面において生活が充実していると感じている人が一定数いることがわかる。一方、「かなり減った」または「少し減った」の割合をみると、⑥元気ではつらつとしていること、⑤自分の将来は明るいと感じること、①忙しく活動的な生活を送ることが「減った」と感じている人などがある程度の割合で存在する。

なお 1 節でも述べたように、これらの項目はいずれも生活復興感や野田村復興感との関連はみられなかった。

（3）「あなたは現在（平成 29 年 8 月）、次にあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。それぞれの質問を読み、当てはまる番号に丸をつけてください」という質問への回答を以下に示す（図 4-5）。

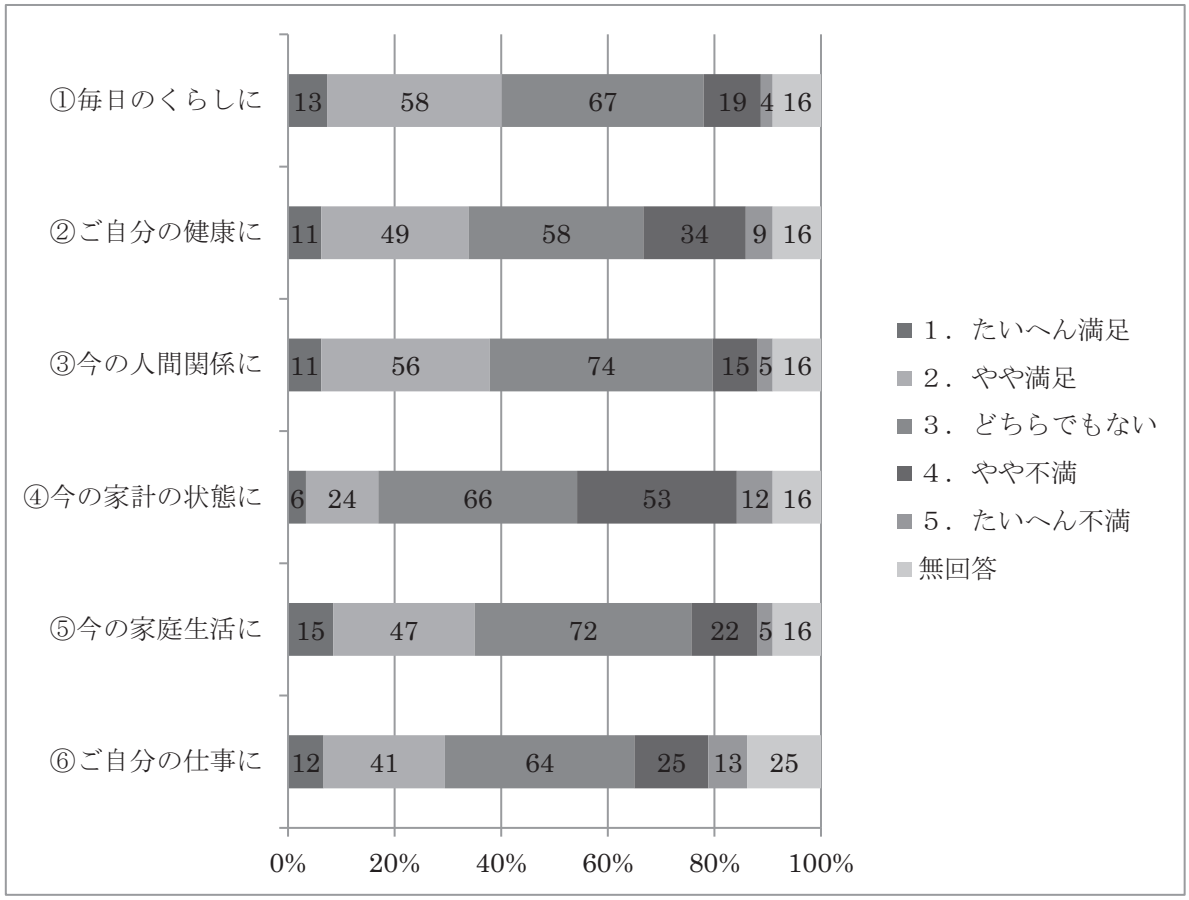


図 4-5　現在の生活満足度

もっとも概括的な①毎日のくらしについては、約 4 割が「たいへん満足」または「やや満足」、同じく約 4 割が「どちらでもない」と回答しており、「やや不満」と「たいへん不満」はあわせて 15%となっている。この傾向は、③今の人間関係や⑤今の家庭生活についてもほぼ同様である。②自分の健康については、「やや不満」または「たいへん不満」という回答が 1/4 以上とやや高くなっている。同じく⑥自分の仕事に不満をもっている人は約 3 割、④今の家計の状態に不満をもっている人は約 4 割である。家庭や人間関係には不満を覚えている人が比較的少ない一方、経済的には不満をかかえている人が比較的多いことがわかる。

3．震災をきっかけとした生活の変化

（1）震災前後の生活の変化のパターン

前節（2）では、震災前後の生活の変化を 8 つの側面について尋ねた結果を示した。ではこれらの側面全体のパターンはどのようなものであろうか。このことを確かめるために、数量化 3 類（パタン分類の数量化）による分析を行なった。投入したアイテム・カテゴリーは、前節（2）各項目の回答選択肢

（「１．かなり増えた」から「５．かなり減った」の５カテゴリー）である。

カテゴリースコアをみると、第１軸には、数値が大きい方に、震災後の生活の変化がマイナス（消極的、否定的）の方向である項目が集まり、数値が小さい方には、震災後の生活の変化がプラス（積極的、肯定的）の方向である項目が集まっていた。このことから、第１軸は、震災を経た現在の生活が肯定的に感じられているか否定的に感じられているかを表しているといえる。一方、第２軸をみると、数値が小さい方には震災前後の生活が「変わらない」という項目が集中しており、数値が大きい方には、それが肯定的か否定的かは別にして、震災前後の変化を示す項目が見て取れた。したがって、第２軸は、震災を契機とした生活の変化の有無を示しているといえる。

否定的な項目、肯定的な項目、「変わらない」がそれぞれまとまりをなしていることは、生活のある側面がよい（悪い）方向に変化したと感じている人は、その他の側面も同じくよい（悪い）方向に変化したと感じており、震災前後に生活の変化を感じていない人はどの側面にも変化を感じていないという傾向があることを示している。

下の図 4-6 は、上記の２軸上に、サンプルスコアをプロットしたものである。縦軸のマイナス付近（横軸の原点付近）には「総じて震災前後の生活の変化がない」人々が集まっている（変化なし群）。横軸のプラス方向には、「総じて震災前後で生活が消極的な方向に変化した」人々（変化－群）、プラス方向には「総じて震災前後で生活が積極的な方向に変化した人々」（変化＋群）のグループをみてとることができる。また、「変化－群」の人々は、震災前後で感じる変化の量のばらつきが大きいのに対して、「変化＋群」では震災前後の変化は比較的小さい。

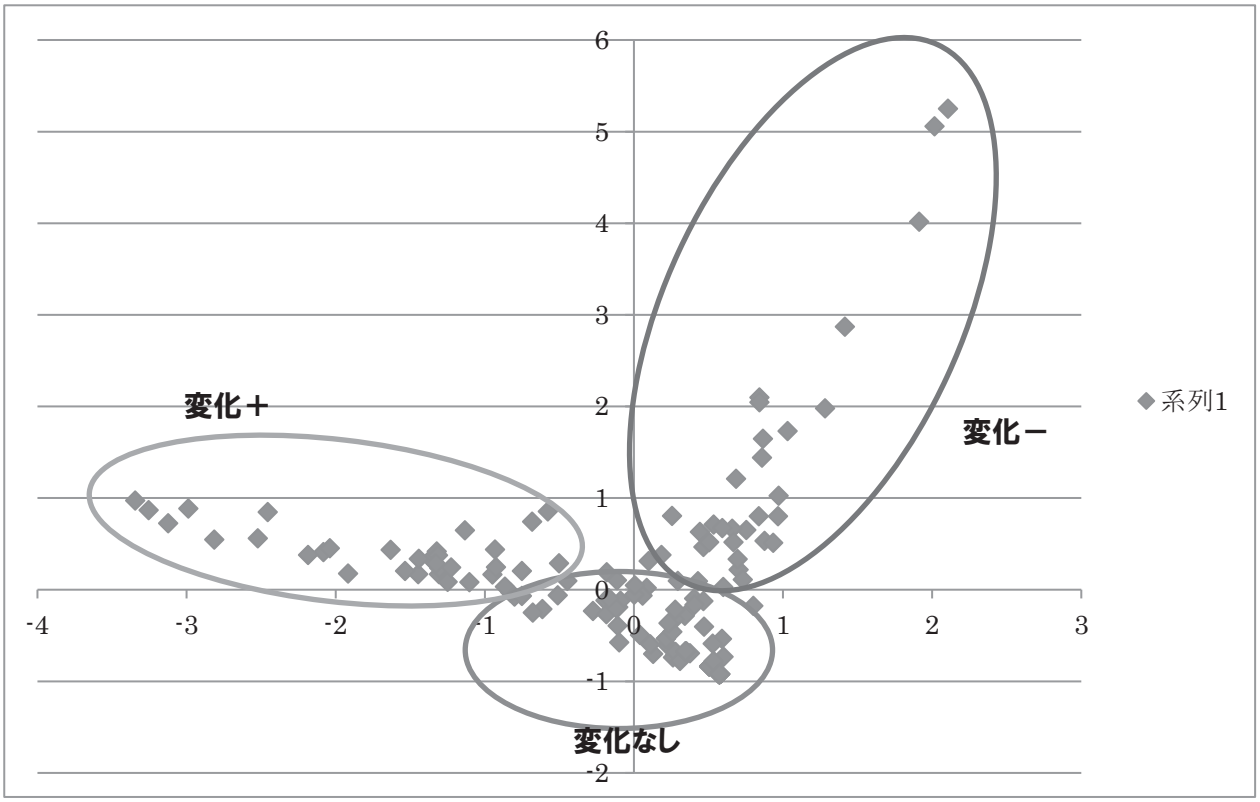


図 4-6　震災前後の生活変化のパターン分類（数量化３類）

（２）震災前後の生活変化の３群と他の質問項目との関連

震災前後の生活変化の 3 群の特徴を検討するために、他の質問項目との関連をみてみよう。以下の分析では、第 2 軸のサンプルスコアが 0 未満の人々を「変化なし」群、0 以上の人々のうち、第 1 軸のサンプルスコアが正の人々を「変化－」群、負の人々を「変化＋」群とする。

下の表 4-1 は、震災前後の生活変化の 3 群を目的変数、他の質問項目を説明変数として、AIC（赤池情報量基準）を用いて二次元クロス表の分析をした結果である。1 節でも述べたように、AIC 値が負で、絶対値が大きいほど、その説明変数は目的変数と強く関連している。

表 4-1　震災前後の生活変化のパターンと関連の強い項目群（AIC）

順位	質問項目	カテゴリー数	AIC 値	AIC の差
1	満足①	5	-33.80	0.00
2	満足③	5	-31.36	2.44
3	満足⑥	5	-30.71	0.65
4	満足⑤	5	-28.75	1.96
5	満足②	5	-19.99	8.76
6	満足④	5	-14.86	5.13
7	増減村外	3	-10.79	4.06
8	つながり①	2	-9.72	1.07
9	増減地域	3	-6.91	2.80
10	つながり⑦	2	-6.03	0.89
11	イベント	2	-5.44	0.58
12	増減仕事	3	-5.03	0.42
13	サークル	2	-3.49	1.53
14	つながり④	2	-2.31	1.19
15	増減家族	3	-1.98	0.32
16	自治会	2	-0.66	1.32
17	つながり⑥	2	-0.59	0.07
18	増減支出	3	1.42	2.01
19	住居被害	5	1.55	0.13
20	つながり③	2	2.13	0.58
21	つながり②	2	3.19	1.06
22	性別	2	3.28	0.09
23	つながり⑤	2	3.36	0.08
24	つながり⑧	2	3.37	0.01
25	つながり⑨	2	3.51	0.14
26	野田村復興	4	5.25	1.75
27	生活復興	4	5.88	0.63
28	増減収入	3	6.58	0.70
29	世帯収入	9	15.60	9.02

以下、AIC の値が小さい順に、言い換えれば、震災前後の生活変化との関連が強い順に見ていこう。上位の 6 項目は、いずれも現在の生活に対する満足度（2 節(3)の項目）である。震災を契機にした生活の肯定的／否定的変化が、現在の生活満足度と強く関連しているのは自然なことと言えるだろう。

現在の生活満足度を除いて最も関連が強いのは、震災の前後で村外の人々との付き合いが増えたか減ったか（増減村外）であり、次に関連が強いのは、震災から 6 年の間に、心を開いて話すことができる人との出会いがあったかどうか（つながり①）である。それぞれの回答パターンを示す。「変化＋」の人は村外の人々との付き合いが増えたのに対して、「変化－」の人はかえって減った人が相対的に多い（図 4-7）。また、「変化＋」の人は心を開いて話すことができる人との出会いが多く、「変化－」の人は少ない（図 4-8）。次に関連の強い「地域の人との付き合いの増減（増減地域）」も同様のパターンを示している。また、「震災から 6 年の間に、自分だけが頼りという気持ちが増した（つながり⑦）」人は、「変化－」に相対的に多い。総じて、AIC 値が低い方の項目をみると、震災前後での付き合いの増減（増減村外、増減地域、増減仕事）、震災を契機とした重要な他者との出会い（つながり①、つながり④）、地域における活動やイベントへの参加（イベント、サークル）が、震災前後の生活の前向きな変化と強く関連していることがわかる。

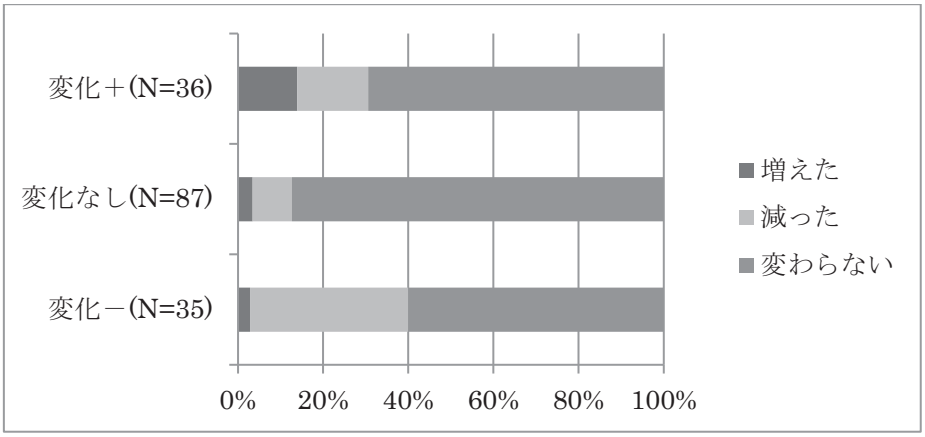


図 4-7　震災前後の村外の人々との付き合いの変化

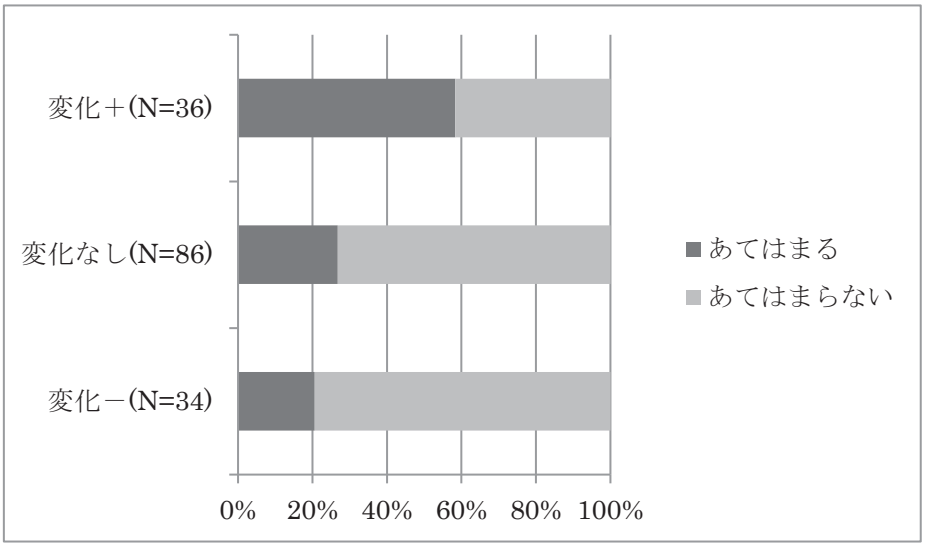


図 4-8　震災後、心を開いて話せる人との出会いの有無

一方、震災津波による住居の被害状況（住居被害）、自身の生活や野田村の復興感（生活復興、野田村復興）は、生活の変化とは関連していなかった。このことは、野田村が全体として「ポスト復興期」ないし日常期に入っていることを示唆している。

この報告書では、震災前後の生活の肯定的・否定的変化とその関連項目について、概括的な分析をした。今後より詳細な分析が必要である。特に、震災を契機に生活のさまざまな側面で消極的、後ろ向きになっている傾向が特に強い人について、きめこまかく検討していくことが重要である。

第 5 章　ジェンダーからみた野田村出身者の意識について

山口　恵子

本章では、ジェンダーからみた野田村出身者の意識に焦点をあてる。とくに女性はどのような経験をし、どのような意識を持っているのか、男性と比較しつつ明らかにする。その際、生活環境や震災の影響が異なることが予想される現在の居住地（移動タイプ）に注目する。村内居住者（定住者、Ｕターン者）と村外居住者（流出者）で経験や意識はどのように異なるのだろうか。

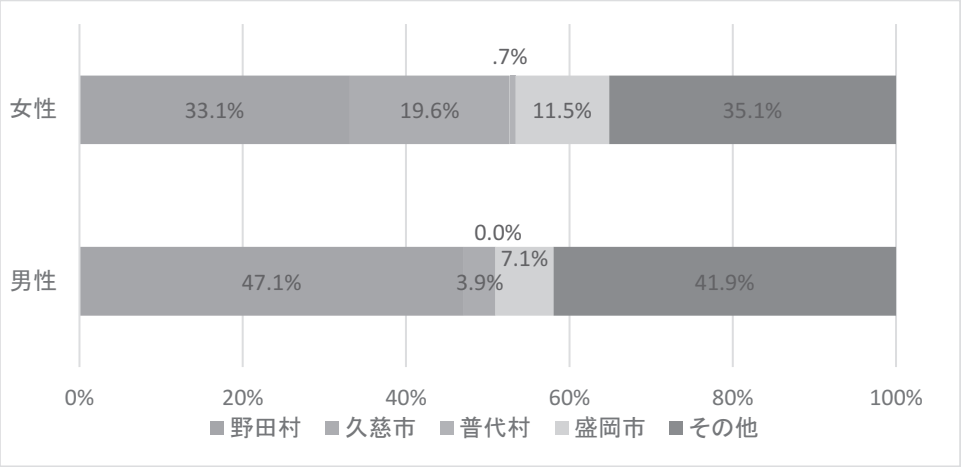
以下、先に、性別・居住地別にどのような属性の特徴があるのか、年齢や婚姻歴、学歴の点からみていく。次に、人とのつながりの変化や出来事の経験について、および生活満足度や幸福度について、性別・居住地別の特徴を明らかにする。その上で、村内居住者の将来の居住希望について示す。最後に全体を振り返ってまとめる。

1.　居住地（移動タイプ）別の属性の特徴

まず、男性と女性とで、村内・村外居住ではどのような傾向があるのか、居住地（移動タイプ）別に、年齢や婚姻状況、学歴などの属性の特徴についてみておこう。

最初に、現在の居住地について確認しておきたい。図 5-1 は、性別に現住地を示している。女性は男性に比べて、野田村内居住者は 33.1％とやや少ないが、隣の久慈市に 19.6％、普代村に 0.7％と、近隣地区に多く居住していることが分かる。そしてこのこと

図 5-1　現在の居住地



注）p<.01

と関連していると思われるが、図表は省略するが、村外居住の女性の村への帰村頻度は、男性と比べてかなり高い。村外居住といっても、男性と比べて女性は村との具体的な接点を日ごろから持つ人々が多いことには留意しておきたい。

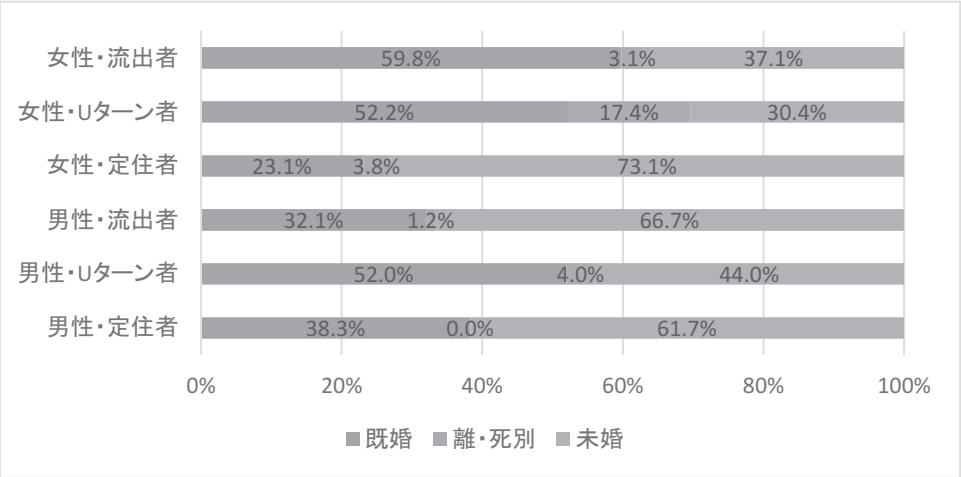
さて、表 5-1 は、移動タイプ別の年齢を示している。ここからは、男性と比べて女性は年齢差が大きいことが分かる。とくに女性の U ターン者の平均年齢は 41.7 歳と高く、一方、女性の定住者は 31.8 歳と若年の傾向がある。一方男性は、流出者が最も若年であり、30.4 歳であった。

表5-1　移動タイプ別の平均年齢

	移動タイプ	平均年齢
女性	定住者	31.8
	Uターン者	41.7
	流出者	35.8
男性	定住者	36.3
	Uターン者	37.4
	流出者	30.4

次に婚姻状況である。全体として、女性は約半数が既婚であり、男性よりも有意に既婚者が多かった。これを移動タイプごとにもう少し詳しく見てみよう。図5-2は、移動タイプ別の婚姻歴を示している。これによると、男性間には有意な差はないが、女性間においては、とくに定住者は未婚が73.1%と比率が高くなっていた。

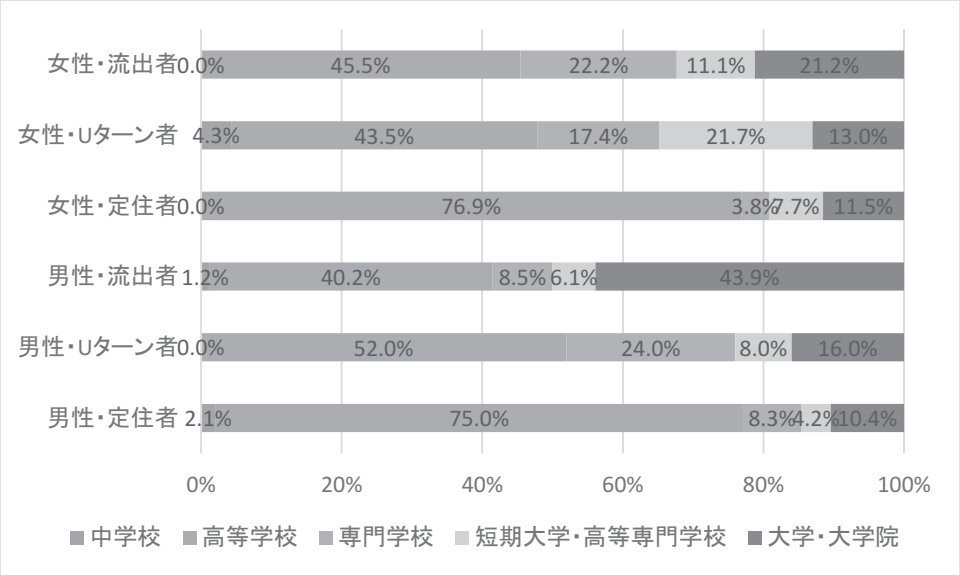
図5-2　移動タイプ別の婚姻歴



注）女性p<.01　男性n.s.

最後に、図5-3は移動タイプ別の学歴を示している。ここからは、男性も女性も定住者は高等学校卒業が7割以上と高い比率となっている。男性と女性とで大きく異なるのは、流出者で、男性の流出者は43.9%が大学・大学院卒業と比率が高い。大学との距離を勘案すると、進学する場合は村外に出る傾向が強く、しかも進学は男性が多いという傾向が反映されているのだろう。

図 5-3　移動タイプ別の学歴



注）女性 p<.01　男性 p<.05

２．　人とのつながりの変化や出来事について

さて、男性と女性、および現住地別に以上のような属性の傾向があることを念頭においた上で、ここからはこの 6 年間の人とのつながりの変化・出来事の経験や、現在の生活満足度・幸福度等の意識についてみていこう。なお、ここでは先の移動のタイプは、定住者とＵターン者は村内居住者として一括し、流出者は村外居住者とカテゴライズされている。

まず、人とのつながりの変化や出来事についてである。この 6 年間はどのように経験されているのだろうか。表 5-2 は、性別・居住地別に、それぞれの項目について「あてはまる」と回答した比率を示している。これによると、とくに村内居住者において、「ボランティアのありがたさを知った」という回答は、男性・女性ともに 5 割を超えて比率が高いが、とくに女性は 77.1%の人があてはまるとしており、高い比率となっていた。また、「近所づきあいの大切さを知った」という項目も同様の傾向があり、女性は 70.8%の人があてはまるとしている。おそらく女性の方がボランティアとの接点や近所づきあいの点で

役割を果たすことが多く、より実感が高いのだろう。

一方で「行政への頼もしさが増した」という回答があてはまるとした女性は 33.3%と高い比率であるが、村外居住者も男女ともに 3 割を超えてあてはまると回答していることを勘案すると、逆に村内居住の男性が 17.9%とやや低いことが気になるところである。

村外居住者については、「同志的なつながりができた」で男性が 27.3%とやや高い傾向にあった。

表 5-2　人とのつながりの変化や出来事について

	村内居住		村外居住	
	男性	女性	男性	女性
心を開いて話すことができる人との出会いがあった	29.9%	26.5%	37.7%	29.3%
生活設計が定まったと感じる人との出会いがあった	15.4%	16.7%	14.3%	11.0%
被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた	19.4%	27.1%	20.8%	13.2%
その後の人生を変える出会いがあった	22.4%	25.0%	19.5%	15.6%
ボランティアのありがたさを知った	54.4%	77.1% *	65.4%	73.9%
同志的なつながりができた	22.7%	14.6%	27.3%	15.4% +
自分だけが頼りという気持ちが増した	20.9%	20.8%	18.4%	14.3%
行政への頼もしさが増した	17.9%	33.3% +	38.2%	31.9%
近所づきあいの大切さを知った	52.2%	70.8% *	59.2%	67.4%

注）**p<.01、*p<.05、+p<.10

３．　生活満足度や幸福度について

次に、現在の生活満足度はどうであろうか。生活満足度は「たいへん満足」と「やや満足」を合わせて「満足」とし、「やや不満」と「たいへん不満」を合わせて「不満」としてまとめている。その上で、表5-3はそれぞれの項目について女性の村内・村外居住者別に、表5-4は男性の村内・村外居住者別に示している。

表5-3　生活満足度（女性）

		満足	どちらでもない	不満	計
毎日のくらし	村内居住	34.0%	40.4%	25.5%	100.0%
	村外居住	56.5%	30.4%	13.0%	100.0% *
健康	村内居住	25.5%	44.7%	29.8%	100.0%
	村外居住	45.7%	28.3%	26.1%	100.0% +
人間関係	村内居住	27.7%	51.1%	21.3%	100.0%
	村外居住	46.7%	38.0%	15.2%	100.0% +
家計状態	村内居住	23.4%	42.6%	34.0%	100.0%
	村外居住	27.2%	32.6%	40.2%	100.0%
家庭生活	村内居住	34.0%	40.4%	25.5%	100.0%
	村外居住	53.3%	31.5%	15.2%	100.0% +
自分の仕事	村内居住	20.0%	48.9%	31.1%	100.0%
	村外居住	42.2%	33.3%	24.4%	100.0% *

注）**p<.01、*p<.05、+p<.10

表5-4　生活満足度（男性）

		満足	どちらでもない	不満	計
毎日のくらし	村内居住	40.3%	46.3%	13.4%	100.0%
	村外居住	42.7%	42.7%	14.7%	100.0%
健康	村内居住	29.9%	37.3%	32.8%	100.0%
	村外居住	50.7%	29.3%	20.0%	100.0% *
人間関係	村内居住	40.3%	47.8%	11.9%	100.0%
	村外居住	52.0%	38.7%	9.3%	100.0%
家計状態	村内居住	17.9%	32.8%	49.3%	100.0%
	村外居住	20.0%	48.0%	32.0%	100.0% +
家庭生活	村内居住	37.3%	38.8%	23.9%	100.0%
	村外居住	33.3%	52.0%	14.7%	100.0%
自分の仕事	村内居住	35.4%	36.9%	27.7%	100.0%
	村外居住	40.8%	36.6%	22.5%	100.0%

注）**p<.01、*p<.05、+p<.10

これによると、とくに女性間で差がみられるようであった。表5-3から、女性間には「毎

日のくらし」「健康」「人間関係」「家庭生活」「自分の仕事」などの多くの項目で差があり、村内居住者は村外居住者に比べて、「満足」とする人がおのおの20%近く低い。そして逆に「毎日のくらし」「家庭生活」が「不満」とする人が、10%以上高い。

一方、男性間で差があったのは限られており、一つは「健康」である。村内居住者は村外居住者に比べて、「健康」が「満足」とする人が20%以上低く、逆に「不満」とする人は10%以上高い。また、「家計状態」については「満足」には大きな差がないが、「不満」については、村内居住者は村外居住者に比べて10%以上高く、村内居住男性の半数近くが家計への不満を持っていた。

続けて、幸福度についてである。幸福度については、村内居住者を定住者とUターン者に分けて、より詳しく見ていこう。幸福度は0点から10点までであてはまる点数が回答されている。表5-5は、移動タイプ別にその幸福度の平均値を示している。これによると、女性の場合は定住者の幸福度が5.15と低く、逆に流出者は6.60と高くなっている。たった1点程度の差ではあるが、男性に大きな差がないがゆえに、女性に差があるのが気になるところである。

表5-5　移動タイプごとの幸福度

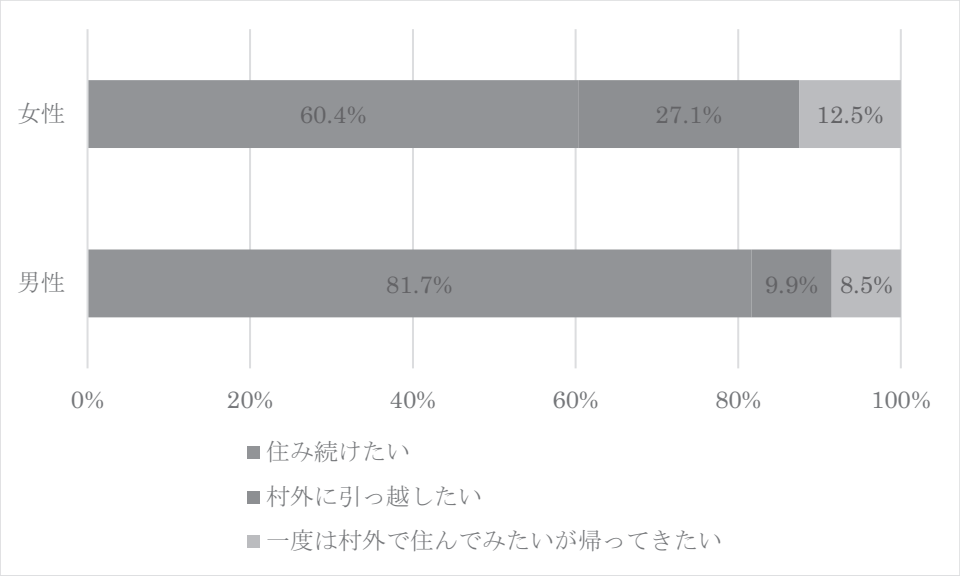
	移動タイプ	平均値
女性	定住	5.15
	Uターン	5.87
	流出者	6.60
男性	定住	5.80
	Uターン	5.40
	流出者	5.90

4．　村内居住者の将来の居住希望

以上のようにみてくると、村内居住の女性の生活満足度や幸福度に課題があることが見えてくる。これは今後の居住希望にも表れているようだ。図 5-4 は、これからもずっと野田村に住み続けたいかどうかについて質問した結果である。これによると、「野田村に住み続けたい」と回答した人が、男性は 81.7%なのに対し、女性は 60.4%と低くなっており、「村外に引っ越したい」と回答した人は、男性が 9.9%なのに対し、女性は 27.1%と高くなっている。

加えて、この村外に引っ越したい理由について、女性は 19 人が回答を寄せていたが、そのうち 8 人は「野田には仕事がない」という回答であった。全体の回答数は少ないが、女性にとっても仕事の問題は切実なものである。

図 5-4　村内居住者の今後の居住の希望



注）p<.05

５．　おわりに

以上をまとめよう。本章では、野田村出身の人々の経験や意識について、ジェンダーに注目して分析を行った。とくに女性の村内居住者（定住者、Ｕターン者）と村外居住者（流出者）の違いに注目した。

まず、男性よりも女性では、野田村村内居住者がやや少なかったが、近隣地区での居住は多く、村への帰村頻度も男性より高かった。女性は村との日常的なつながりを多く持っていた。次に、この6年間の人とのつながりの変化・出来事の経験としては、とくに女性の村内居住者において、ボランティアのありがたさや近所づきあいの大切さを知ったという回答が男性に比べてとくに高く、女性の方がボランティアとの接点や近所づきあいの点で役割を果たすことの影響がうかがえた。

そして、意識については、とくに女性は村内居住と村外居住で多くの点で生活満足度に差がみられ、とくに幸福度については村内居住者のうちでも定住者の得点がやや低かった。これは村内居住者の将来の居住希望にも表れているようであり、男性に比べて女性は村外への移住希望が高かった。

この将来の居住希望については、2013年9月に野田村居住者に対して行ったアンケート調査でも類似した傾向がみられたが（住み続けたい男性84.7%、女性77.8%、村外に移住

したい男性8.0%、女性15.5%）[1]、本調査ではさらに村外移住希望の比率が高くなっていた。これは前調査が50代・60代が主な回答者であったのに対し、本調査は30代が中心であるという年齢層の違いが大きく、必ずしもこの3年間のうちに離村希望が強まったということではないだろう。つまり、仕事や家族の関係で離村しにくい中高年者と比べて、これから比較的変化が起きやすい若年者の傾向も加味されるべきだろう。とくに本調査の村内居住者のなかでも女性の定住者は、前述したように未婚の若年女性が多く、その傾向が強いと考えられる。

しかし、それはもちろん楽観視できることではない。今後の村の未来を担う若年層、とりわけ若年の女性は、貴重な村の宝である。女性にとって居心地のよい村、住みたい村となるように、魅力的な村づくりを考えていくべきであろう。

[1] 弘前大学人文学部編集・発行、2013、『野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書』p.23

第６章　野田村をめぐる移動パス

日比野　愛子

１．　問題

本章では、野田村から人々が移動していく地理的な範囲や、移動のパス（経路）を、単純集計をもとに報告する。小さな自治体にとって、人口の社会増減は大きな影響を与える。こうした社会増減において具体的に人々はどのような地域に移動していくのだろうか。たとえば、一度地域を離れるとしても、再び地域に帰還するＵターン者とそのまま他地域に住み続ける流出者が存在する。こうした移動傾向の違いには、属性や意識、また社会ネットワーク等が影響していると考えられるが、最初の居住地域や、移動の回数について確認することも有効であろう。図 6-1 は、岩手県を１つのブロックと見て、地域別の移動数を計上したものである（2010 年～2014 年）。東京圏、東北圏への移動者が多いことが分かる。こうした移動者のその後の動き方はどのようになっているだろうか。本章では、野田村を起点として人々がどのような場所に動いていくのかに注目する。

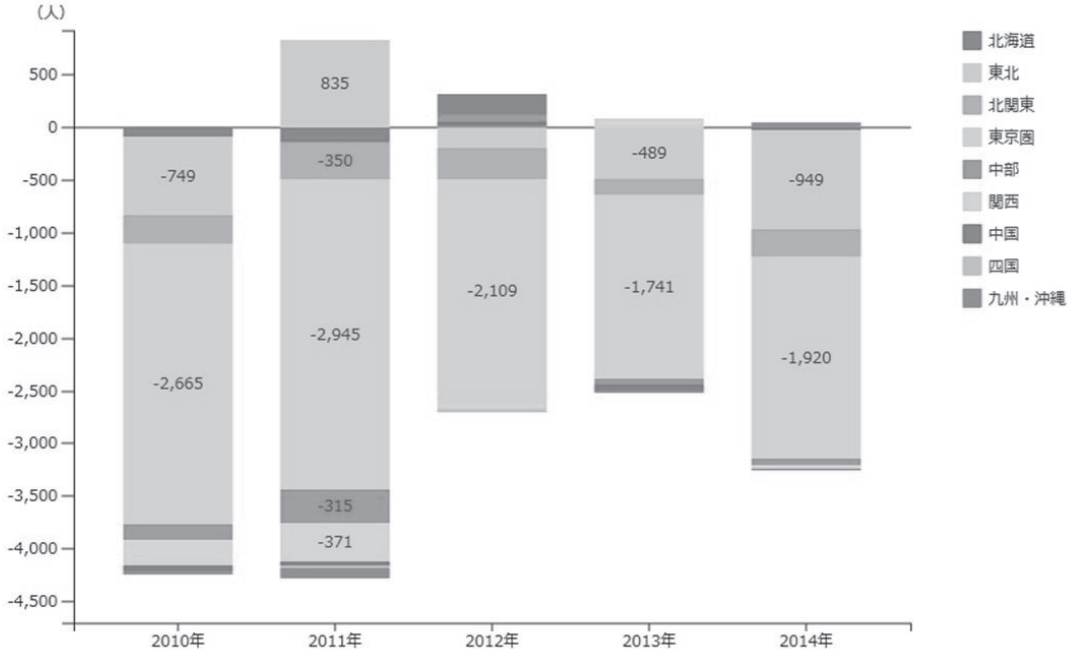


図 6-1　岩手県地域ブロック別純移動数
（RESAS より作成）

２．　方法

2017 年に実施された「野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査」のデータを用い、回答結果に記された「住んでいた地域」（最高 4 か所まで記載可）を、基本的に都道府県レベルでコーディングした。なお、野田村、普代村、久慈市、盛岡市のみ市区町村レベルでのカテゴリによる集計を行った。

野田村関係者のライフステージで生じている移動の状況を調べるため、野田村から移動して、現在も野田村外で居住している群（流出者 183 名）と、野田村から移動したが現在は野田村に居住している群（Ｕターン者 49 名）のパスを抽出した。それぞれの群の回答者が、具体的にどの地域に移動していったのかを分岐図の形式で整理した。

なお、本分析では、震災前後の移動についても、震災後に移動しそのまま野田村に戻らなかった群、震災後に移動し野田村に戻ってきた群のトラックを抽出し、それぞれの群の回答者が、具体的にどの地域に移動していったのかを分岐図の形式で整理した。こちらの群については実数が非常に小さいため、今回の報告では割愛する。

今回の質問紙調査は回答者が限定されており、その中でも移動の詳細について述べられた件数は少ない。そのため、本報告は実態を把握するというより、あくまで移動の範囲や、パターンを概観するにとどまることを了承いただきたい。

３．　結果

流出者の第１回目の移動先を表 6-1 に、Ｕターン者の第 1 回目の移動先を表２に示す。岩手県ブロックに移動したものは、流出者のうち 43.2%、Ｕターン者のうち 44.8%であり、それぞれ約半数弱を占める。東北圏内へ移動したものは、流出者のうち 18.6%、Ｕターン者のうち 26.5%となる。Ｕターン者の第 1 回目の移動先としては、宮城県がやや多い点が特徴的である。関東圏内へ移動したものは、流出者のうち 39.3%、Ｕターン者のうち 24.5%となる。関東圏内への移動は、Ｕターンではなく、県内流出とつながることが示唆される。流出者とＵターン者の移動先について、地理的な範囲としては大きな違いはなく、両者とも第１回目の移動は、岐阜県・愛知県を南端とする。

続いて、流出者、また、Ｕターン者の移動のパス（経路・分岐図）から示唆されることを下記に示す。まず、最初の移動がその先の移動先を規定している傾向がうかがえる。最初の移動には、大きく東北圏内か関東圏というパターンがあり、その後の移動先は同圏内にとどまりやすい。図 6-2a, b では、移住者の中でも、第１回目に盛岡市や久慈市など野田村周辺に移住した回答者と、東京都・神奈川県といった関東圏に移住した回答者を取り上げ、その後の移動のパスを示している。盛岡市への移住者が比較的、盛岡市周辺地域に留まるのに対し、例えば神奈川県への移住者は、同県への残留に加え、東京や、埼玉などの関東圏に移動する。また、野田村へ一度Ｕターンした事例の中でも、再び、盛岡市や岩手県内他地域に住

むケースがみられる。限られたサンプルでの調査であり、結論には留意する必要があるが、流出者のパスは、Uターン者のパスと比べて、複雑になると考えらえる。

今回得られた移動データの全経路を分析にかけることで、野田村出身者からみた他地域の認知的なグルーピングや近縁性が見えてくると考えられる。多次元尺度法などを活用した詳細な分析は次年度以降の課題としたい。

表 6-1　流出者の 1 回目の移動先

1回目の移住先	度数	割合
久慈市	25	13.7%
普代村	1	0.5%
盛岡市	34	18.6%
岩手県	19	10.4%
北海道	5	2.7%
青森県	19	10.4%
宮城県	12	6.6%
山形県	2	1.1%
福島県	1	0.5%
栃木県	2	1.1%
群馬県	1	0.5%
埼玉県	11	6.0%
千葉県	15	8.2%
東京都	29	15.8%
神奈川県	17	9.3%
新潟県	1	0.5%
山梨県	1	0.5%
長野県	1	0.5%
岐阜県	2	1.1%
愛知県	3	1.6%

表 6-2　Ｕターン者の 1 回目の移動先

1回目の移住先	度数	割合
久慈市	11	22.4%
盛岡市	8	16.3%
岩手県	3	6.1%
北海道	1	2.0%
青森県	5	10.2%
宮城県	7	14.3%
山形県	1	2.0%
埼玉県	1	2.0%
千葉県	5	10.2%
東京都	4	8.2%
神奈川県	2	4.1%
岐阜県	1	2.0%

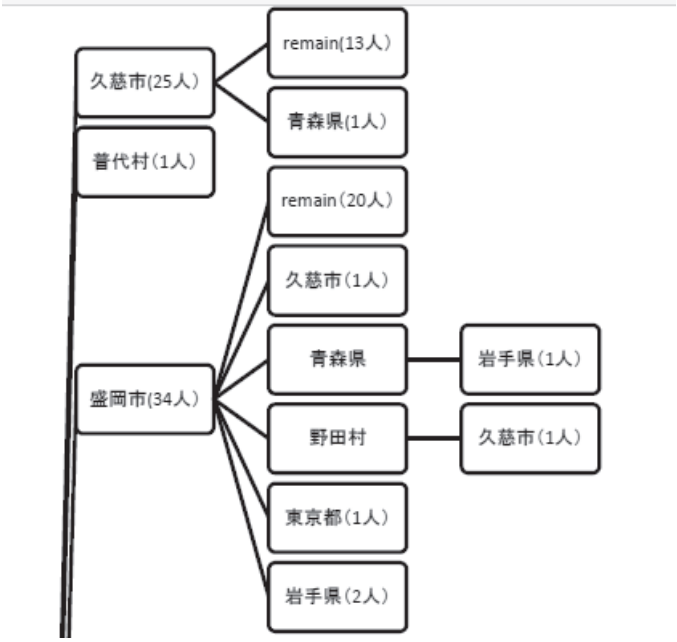


図 6-2a 野田村周辺への移住者（流出者）のパス

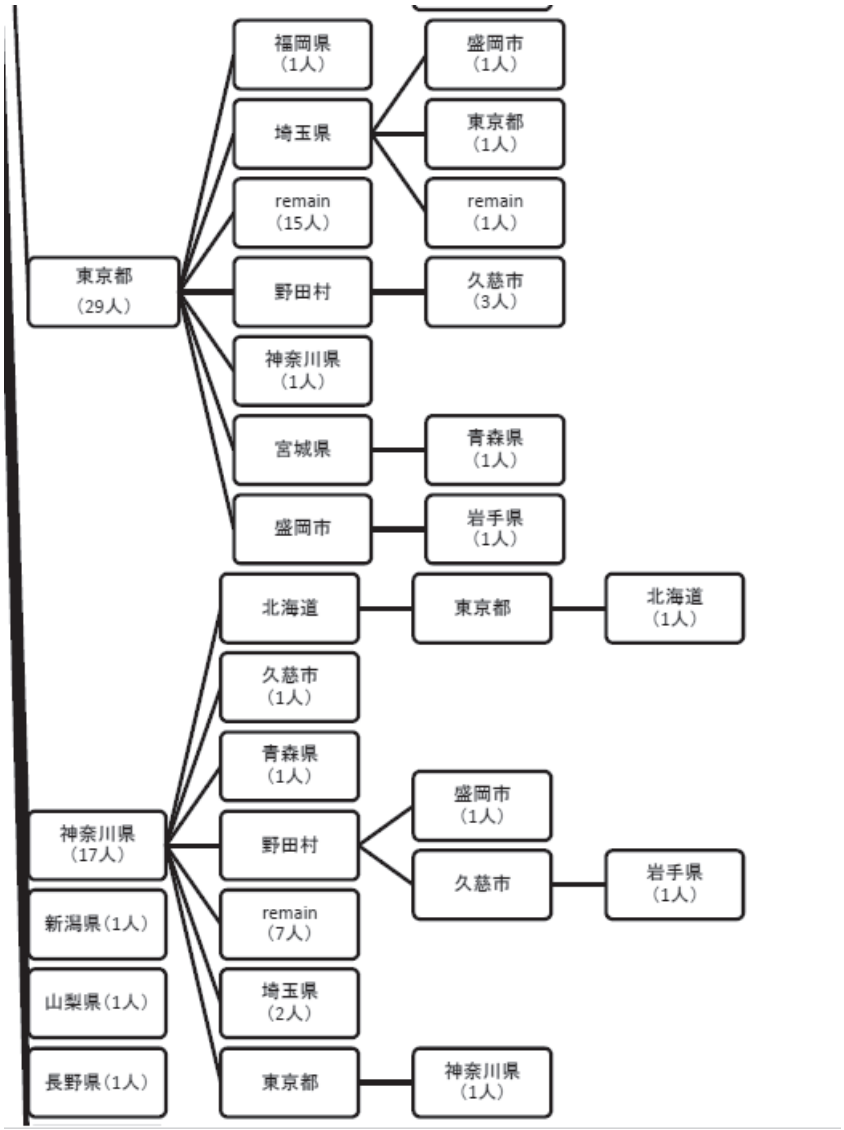


図 6-2b 東京都・神奈川県への移住者（流出者）のパス

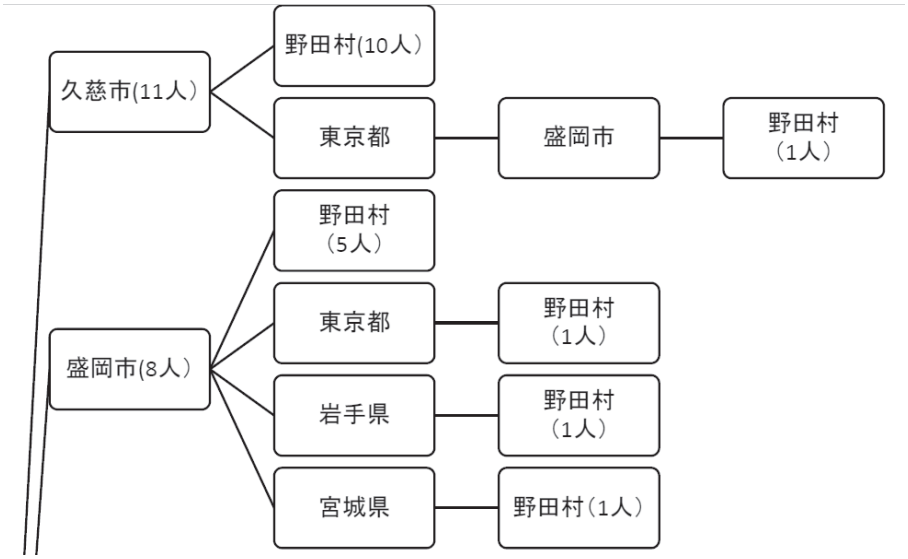


図 6-3a 野田村周辺に移住したUターン者のパス

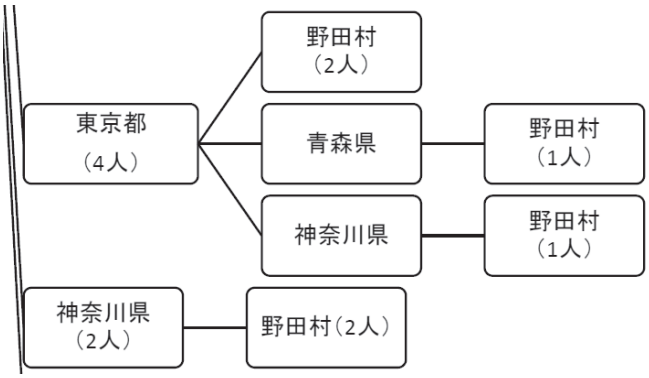


図 6-3 b　東京都・神奈川県に移住したUターン者のパス

回答者集計表

野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査　集計表

n ＝307
計画数 1276　回収率　307/1124=0.273
無効票（住所不明など）152

問１　あなたの現在のお住まいの所在地を教えてください。

	野田村	久慈市	普代村	盛岡市	北海道	青森県	岩手県	宮城県
調査数	124	35	1	28	4	12	18	17
構成比率	40.39	11.40	0.33	9.12	1.30	3.91	5.86	5.54

	山形県	福島県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県
調査数	1	1	2	4	10	6	25	10
構成比率	0.33	0.33	0.65	1.30	3.26	1.95	8.14	3.26

	新潟県	山梨県	長野県	岐阜県	愛知県	福岡県	その他	無回答
調査数	1	1	2	1	2	1	1	0
構成比率	0.33	0.33	0.65	0.33	0.65	0.33	0.33	0

【現在、「野田村」以外にお住いの方におうかがいします。問２～問８までお答えください。】

➡現在「野田村」にお住いの方は３頁の問９へお進みください。

問２　「野田村」にはどれくらいの頻度で帰っていますか。

	月　1回 以上	2～4ヶ月に 1回程度	年に 1～2回	数年に 1回	ほとんど帰らない	まったく帰らない	ほぼ毎日通勤（通学している）	無回答
調査数	35	45	79	8	9	2	5	0
構成比率	19.13	24.59	43.17	4.37	4.92	1.09	2.73	0

問３　あなたはいつかは「野田村」に戻りたいと思っていますか。

	戻りたい	多少戻りたい	どちらとも言えない	あまり戻りたくない	戻りたくない	考えたことがない	無回答
調査数	25	35	54	13	16	37	3
構成比率	13.66	19.13	29.51	7.10	8.74	20.22	1.64

問４　あなたが「野田村」に戻ることを期待している人はいますか。

	いる	いない	分からない	無回答
調査数	68	39	76	0
構成比率	37.16	21.31	41.53	0

いると答えた人の中で家族と答えた人は61人、友人と答えた人は５人、無回答は６人

問５　「野田村」に戻りたいという気持ちは東日本大震災で変わりましたか。

	戻りたい気持ちが強くなった	全く変わらない	戻りたい気持ちが強くなった	よく分からない	無回答
調査数	27	90	6	58	2
構成比率	14.75	49.18	3.28	31.69	1.09

問６　では、実際に「野田村」に戻る予定はありますか。

	具体的に戻る計画を立てている	将来的に戻る予定	戻るかどうか分からない	戻る予定はない	無回答
調査数	3	24	81	74	1
構成比率	1.64	13.11	44.26	40.44	0.55

問７　問６で「１　具体的に戻る計画を立てている」「２　将来的に戻る予定」と考えた方

にお伺いします。「野田村」に戻るとしたらいつごろ戻るつもりですか。もっともあてはまるものを、１つだけお選びください。

	すぐにでも	結婚をきっかけに	自分または配偶者が「野田村」に仕事を見つけたら	子供が独立したら	親・義親の健康に不安が生じたら
調査数	1	2	6	1	3
構成比率	3.57	7.14	21.43	3.57	10.71

	自分または配偶者が定年になったら	自分または配偶者に、家を継ぐ必要が生まれたら	その他	具体的には分からない	無回答
調査数	2	1	3	6	3
構成比率	7.14	3.57	10.71	21.43	10.71

問８　問６で「３　戻るかどうかわからない」「４　戻る予定はない」と考えた方にお伺いします。それはなぜですか。

140 人が回答、１６人が無回答

理由：仕事、職に関すること　６７人

結婚に関すること　３３人

子供に関すること　１０人

家を建てたなど、居住に関すること　２９人

その他　３８人

【現在、「野田村」にお住まいの方におうかがいします。】

問９　これからもずっと、「野田村」に住み続けたいと思いますか。

	野田村に住み続	村外に引っ	一度は、村外で住んでみたい	無回答

	けたい	越したい	が、そのうち帰ってきたい	
調査数	89	20	12	3
構成比率	71.77	16.13	9.68	2.42

問１０　「野田村」に住み続けたい理由は何ですか。

	村内に仕事があるから	野田村は生活が便利	知り合いに囲まれて暮らしたい	家族が希望している	震災があったから	その他	無回答
調査数	31	3	26	13	2	14	3
構成比率	33.70	3.26	28.26	14.13	2.17	15.22	3.26

問１１　村外に引っ越したい理由は何ですか。

もっともあてはまるものを、１つだけお選びください。

	野田村には仕事がない	野田村では、生活が不便	野田村では付き合いが大変	家族が希望している	震災があったから	その他	無回答
調査数	11	6	6	0	1	7	4
構成比率	31.43	17.14	17.14	0	2.86	20.00	11.43

問１２　20 歳以下のお子さん、お孫さんがいらっしゃる方、みなさんにおたずねします。お子さんやお孫さんに、将来、野田村に住んでほしいと思いますか。

	野田村に住み続けてほしい	村外で暮らしてほしい	一度は村外で暮らすかも知れないが、いつかは帰ってきてほしい	無回答
調査数	9	4	18	3
構成比率	26.47	11.76	52.94	8.82

【全員の方におうかがいします】

Ⅰ．震災での被害についておたずねします。

問１３　お住まいに被害はありましたか。

	被害はなかった	全壊（流失等）	大規模半壊	半壊	一部損害	無回答
調査数	226	41	12	7	17	4
構成比率	73.62	13.36	3.91	2.28	5.54	1.30

問１４　震災が起こった以降のお住まいを、避難所や仮設住宅などを含めて教えてください。あなたは震災が起こった以降から現在までの間、何カ所のお宅に住みましたか

	震災当時の家にずっと住み続けている	１ヶ所～３ヶ所	３ヶ所以上	無回答
調査数	162	106	23	16
構成比率	52.77	34.53	7.49	5.21

問１３　震災当時（平成２３年３月１１日）のお住まいの、所在地、所有形態などを下の表にご記入ください。

	所在地	所有形態（○は１つ）	あなたの親とは（○は１つ）
震災当時のお住まい	１　野田村 （　　地区） ２（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	１．自分か配偶者の持家 ２．民間の賃貸住宅 ３．公営の賃貸住宅 ４．社宅・官舎・寮 ５．親または子供の持家 ６．その他（　　）	１．同居 ２．一時は同居 ３．別居 ４．二人とも他界していた

	住んだ期間	所在地	所有形態 （○は１つ）	あなたの親とは （○は１つ）

震災直後からのお住まい	平成（23）年3月11日 ～ 平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳 まで住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた
その次のお住まい	平成（　　）年～ 平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳 まで住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた
その次のお住まい	平成（　　）年～ 平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳 まで住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた

問１５　あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

	ほぼ復興した	半分以上復興した	やや進んでいる	まったく進んでいない	無回答
調査数	218	33	31	6	19
構成比率	71.01	10.75	10.10	1.95	6.19

問１６　あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

	ほぼ復興した	半分以上復興した	やや進んでいる	まったく進んでいない	無回答
調査数	58	135	101	8	5
構成比率	18.89	43.97	32.90	2.61	1.63

Ⅱ．震災前後の人付き合いについておたずねします。

問１７　震災の前**後で**、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々

とのお付き合いは増えましたか、減りましたか。

（1）家族・親せき

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	31	24	247	5
構成比率	10.10	7.82	80.46	1.63

（2）地域の仲間

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	23	43	233	8
構成比率	7.49	14.01	75.90	2.61

（3）仕事の仲間

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	35	19	230	23
構成比率	11.40	6.19	74.92	7.49

（4）村外の人々

	増えた	減った	変わらない	無回答
調査数	54	20	219	14
構成比率	17.59	6.51	71.34	4.56

問１８　現在、日常的に連絡を取っている、野田村出身の家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間は何人くらいいますか。そうした方々は、震災前は、何人くらいいましたか。それぞれ、お答えください。

いない場合、いなかった場合は、0 人とお答えください

（1）家族・親せき

現在は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
40	0	6.31	6.10	49（15.96）

震災前は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
40	0	6.32	6.26	54（17.59）

（２）地域の仲間

現在は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
30	0	4.74	6.18	57（18.57）

震災前は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
30	0	4.73	6.39	63（20.52）

50 人以上と答えた 1 名を除く

（３）仕事の仲間

現在は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
40	0	3.73	5.79	72（23.45）

50 人以上と答えた 2 名を除く

震災前は

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
30	0	2.67	5.16	80（26.06）

50 人以上と答えた 2 名を除く

問１９　以下のようなことについて、家族や親せき以外の、野田村の知り合いで実際に手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたりする人はいますか。

（１）健康の相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	104	405	0	5	83	10

構成比率	33.88	34.20	0	1.63	27.04	3.26

（２）冠婚葬祭の手伝い

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	106	112	1	0	76	11
構成比率	34.64	36.60	0.33	0	24.84	3.59

（３）農作業の手伝い

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	107	49	3	0	131	17
構成比率	34.85	15.96	0.98	0	42.67	5.54

（４）オカネの相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	124	54	2	0	116	11
構成比率	40.39	17.59	0.65	0	37.79	3.58

（５）仕事の相談

	いない	いる	震災前はいたが、今はいない	震災前はいなかったが、今はいる	必要ない	無回答
調査数	89	115	3	2	86	12
構成比率	28.99	37.46	0.98	0.65	28.01	3.91

問２０　普段、あなたが何かを手伝ったり、相談に乗ったりすることはありますか。

（1）家族・親せきのために

	よくある	たまにある	あまりない	無回答
調査数	54	141	105	7
構成比率	17.59	45.93	34.20	2.28

（2）家族・親せき以外の、野田村の知り合いのために

	よくある	たまにある	あまりない	無回答
調査数	19	103	176	9
構成比率	6.19	33.55	57.33	2.93

問２１　震災から６年以上、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに〇をしてください。

①心を開いて話すことができる人との出会いがあった

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	92	197	18
構成比率	29.97	64.17	5.86

②その人のお陰で被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	40	245	22
構成比率	13.03	79.80	7.17

③被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	56	231	20
構成比率	18.24	75.24	6.51

④その後の人生を変える出会いがあった

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	58	228	21
構成比率	18.89	74.27	6.84

⑤ボランティアのありがたさを知った

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	197	93	17
構成比率	64.17	30.29	5.51

⑥震災をきっかけに同志的なつながりができた

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	59	227	21
構成比率	19.22	73.94	6.84

⑦自分だけが頼りという気持ちが増した

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	52	234	21
構成比率	16.94	76.22	6.84

⑧行政への頼もしさが増した

	あてはまる	あてはまらない	無回答

調査数	89	197	21
構成比率	28.99	64.17	6.84

⑨近所づきあいの大切さを知った

	あてはまる	あてはまらない	無回答
調査数	180	107	20
構成比率	58.63	34.85	6.51

Ⅲ．これまでの暮らしについておたずねします。

問２３　あなたが高校生のときから震災時（2011 年 3 月 11 日）までの間、何カ所のお宅に住みましたか

	１ヶ所～３ヶ所	３ヶ所以上	この後引っ越していない	無回答
調査数	155	27	71	54
構成比率	50.49	8.79	23.13	17.59

	住んだ期間	所在地	所有形態 （○は１つ）	そこに引っ越した一番のきっかけ（○は１つ）	あなたの親とは（○は１つ）
（1）高校時の家	昭和・平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他		1．同居 2．別居 3．その他

（2）高校卒業後初めて移動した先	昭和・平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1進学 2自分か配偶者の就職・転職・転勤 3結婚 4離婚・死別 5親と一緒（近く）に住むため 6子と一緒（近く）に住むため 7持家取得、住環境・通勤の都合 8その他 （ ）	1．同居 2．別居 3．その他
その次のお住まい	昭和・平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1進学 2自分か配偶者の就職・転職・転勤 3結婚 4離婚・死別 5親と一緒（近く）に住むため 6子と一緒（近く）に住むため 7持家取得、住環境・通勤の都合 8その他 （ ）	1．同居 2．別居 3．その他
その次のお住まい	昭和・平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1進学 2自分か配偶者の就職・転職・転勤 3結婚 4離婚・死別 5親と一緒（近く）に住むため 6子と一緒（近く）に住むため 7持家取得、住環境・通勤の都合 8その他 （ ）	1．同居 2．別居 3．その他

問２４　震災後、野田村に引っ越ししてきた方におうかがいします。野田村に帰ってくることになった理由を教えてください。主なものをいくつか選んで下さい。

28 人が該当、無回答 15 人（53.57）

１．震災があったから４人
２．家業を継ぐため　１人
３．豊かな自然の中で暮らしたかったから　２人

４．知り合いに囲まれて暮らしたかったから　１人
５．野田村に住んでいた家族が、希望したから　２人
６．当時の仕事を変えたかったから／仕事がなかったから　４人
７．家族が心配で一時的に帰ってきた　１人
８．その他　４人

問２５　野田村に帰ってくる前に、心配したことを教えてください。主なものをいくつか選んで下さい。

28 人が該当、無回答 15 人（53.57）

１．収入が減ること　４人
２．生活が不便になること　４人
３．人間関係に不安があった　１人
４．自分以外の家族が生活すること　０人
５．仕事が見つかるかどうか　７人
６．特に心配したことはない　４人
７．その他　２人

Ⅳ　最後に、ご自身のことをお聞きします。

問２６　あなたの性別を教えてください。

	男	女	無回答
調査数	155	148	4
構成比率	50.49	48.21	1.30

問２７　あなたの生年月を教えてください。

明治・大正・昭和・平成　（　　）年　（　　）月

問２８　あなたは、長子（長男・長女）ですか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	172	131	4
構成比率	56.03	42.67	1.30

問２９　あなたが最後に通われた学校についてお答えください。

	中学校	高等学校	専門学校	短期大学・ 高等専門学校	大学・大学院	無回答
調査数	3	157	44	27	72	4
構成比率	0.89	51.14	14.33	8.79	23.45	1.30

問３０　あなたは、現在結婚していますか。

	結婚している	離別・死別した	結婚していない	無回答
調査数	133	11	159	4
構成比率	43.32	3.58	51.79	1.30

問３１　結婚している、していた方にお聞きします。配偶者のご出身は野田村ですか。

	はい	いいえ	無回答
調査数	26	117	5
構成比率	17.57	79.05	3.38

配偶者の出身

	野田村	久慈市	普代村	盛岡市	北海道	青森県	岩手県
調査数	26	46	3	4	1	9	19
構成比率	19.40	34.33	2.24	2.99	0.75	6.72	14.18

	宮城県	秋田県	福島県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県
調査数	4	1	1	3	2	3	2
構成比率	2.99	0.75	0.75	2.24	1.49	2.24	1.49

	岐阜県	静岡県	岡山健	熊本県	鹿児島県	無回答
調査数	1	1	1	1	1	5
構成比率	0.75	0.75	0.75	0.75	0.75	3.73

問３２　お子さんはいらっしゃいますか。

	いない	いる	無回答
調査数	27	117	4
構成比率	18.24	79.05	2.70

いると回答 117 名で

娘

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数

3	0	1.04	0.89	1

息子

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
4	0	1.09	0.78	1

問３３　野田村以外で生活しているお子さんはいらっしゃいますか。

	いない	いる	無回答
調査数	55	81	8
構成比率	38.19	56.25	5.56

いると回答した 81 名の中で

娘

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
3	0	0.80	0.84	3

息子

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
4	0	0.99	0.83	3

問３４　あなたは、震災前までは何人世帯でしたか。

	１人	２人	３人	４人	５人以上	無回答
調査数	39	14	48	71	115	20
構成比率	12.70	4.56	15.64	23.13	37.46	6.51

問３５　あなたは、現在何人世帯ですか。

	１人	２人	３人	４人	５人以上	無回答
調査数	74	44	49	65	63	12
構成比率	24.10	14.33	15.96	21.17	20.52	3.91

問３６　震災前のあなたの主なご職業は何ですか。

	農林業	漁業	水産・食品加工業	製造・生産工場	建設・労務
調査数	6	5	0	21	18
構成比率	1.95	1.63	0	6.84	5.86

	卸売・小売	サービス業	飲食・宿泊業	医療・福祉	専門的・技術的職業
調査数	7	38	12	27	20
構成比率	2.28	12.38	3.91	8.79	6.51

	管理的職業	公務員	その他	無回答
調査数	1	15	113	24
構成比率	0.33	4.89	36.81	7.82

問３７　震災前は、どのような働き方をしていましたか

	自営業・会社経営	家業の手伝い	正規の職員・従業員	パート・アルバイト	派遣社員

調査数	12	4	110	27	3
構成比率	3.91	1.30	35.83	8.79	0.98

	契約社員・委託	日雇い、出稼ぎ	専業主婦（主夫）	無職	その他	無回答
調査数	16	3	16	7	81	28
構成比率	5.21	0.98	5.21	2.28	26.38	9.12

問３８　あなたの主なご職業は、震災で変化しましたか

	震災前と同じ仕事をしている	震災が原因で無職になった	震災をきっかけに職についた
調査数	126	4	6
構成比率	41.01	1.30	1.95

	震災をきっかけに転職、転業した	震災前も今も働いていない	無回答
調査数	32	21	118
構成比率	10.42	6.84	38.44

問３９　震災前のお勤め先の、現時点での復旧状況を教えてください。

	ほとんど復旧していない	仮設店舗・事務所で再開した	半分程度復旧した
調査数	3	2	7
構成比率	0.98	0.65	2.28

ほぼ震災前の状況に復旧した	被害はなかった	勤めていなかった	無回答

58	102	44	91
18.89	33.22	14.33	29.64

問４０　出稼ぎの経験はありますか。

	経験がない	少ないがある	よく行っていた	今もよく行く	無回答
調査数	229	19	6	5	48
構成比率	74.59	6.19	1.95	1.63	15.64

問４１　あなた個人の収入も含めて、同居している家族全体では、どのくらいの年収がありますか。

税引き前の額でお答えください（手取り額ではありません）。

	収入はない	100 万円未満	100～200 万円未満	200～300 万円未満	300～400 万円未満
調査数	10	6	24	41	49
構成比率	3.26	1.65	7.82	13.36	15.96

	400～600 万円未満	600～800 万円未満	800 ～ 1,000 万円未満	1,000 万円以上	無回答
調査数	68	32	12	13	52
構成比率	22.15	10.42	3.91	4.23	16.94

問４２　震災前と現在で収入、支出、貯金額は増えましたか、減りましたか。

（１）収入

	増えた	変わらない	減った	無回答

調査数	67	132	57	51
構成比率	21.82	43.00	18.57	16.61

（２）支出

	増えた	変わらない	減った	無回答
調査数	128	114	9	56
構成比率	41.69	37.13	2.93	18.24

（３）貯金

	増えた	変わらない	減った	無回答
調査数	43	121	86	57
構成比率	14.01	39.41	28.01	18.57

問４３　現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を 10 点、「とても不幸」を０点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで〇をつけてください。

０――１――２――３――４――５――６――７――８――９――10

最大値	最小値	平均値	中央値	無回答数
10	0	6.00	2.12	17

問４４　あなたは、現在（平成 29 年 8 月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に〇をつけてください。

あなたは震災前と比べて

①忙しく活動的な生活を送ることは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	21	24	137	59	39	27

構成比率	6.84	7.82	44.63	19.22	12.70	8.79

②自分のしていることに生きがいを感じることは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	15	31	155	59	20	27
構成比率	4.89	10.10	50.49	19.22	6.51	8.79

③まわりの人びととうまくついあっていくことは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	10	23	163	65	19	27
構成比率	3.26	7.49	53.09	21.17	6.19	8.79

④日常生活を楽しく送ることは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	11	27	158	63	21	27
構成比率	3.58	8.79	51.47	20.52	6.84	8.79

⑤自分の将来は明るいと感じることは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	27	43	153	42	14	28
構成比率	8.79	14.01	49.84	13.68	4.56	9.12

⑥元気ではつらつとしていることは、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	16	48	158	41	17	27
構成比率	5.21	15.64	51.47	13.36	5.54	8.79

⑦家で過ごす時間は、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	29	33	148	47	22	28
構成比率	9.45	10.75	48.21	15.31	7.17	9.12

⑧仕事の量は、

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	無回答
調査数	17	16	119	71	49	35
構成比率	5.54	5.21	38.76	23.13	15.96	11.40

問４５　あなたは現在（平成 29 年 8 月）、つぎにあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。それぞれの質問を読み、あてはまる番号に〇をつけてください。

以下のことについてのあなたの満足度は

①毎日のくらしに、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	21	109	110	37	7	23
構成比率	6.84	35.50	35.83	12.05	2.28	7.49

②ご自分の健康に、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	18	95	96	62	13	23
構成比率	5.86	30.94	31.27	20.20	4.23	7.49

③今の人間関係に、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	18	107	120	29	10	23
構成比率	5.86	34.85	39.09	9.45	3.26	7.49

④今の家計の状態に、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	10	53	110	84	27	23
構成比率	3.26	17.26	35.83	27.36	8.79	7.49

⑤今の家庭生活に、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	26	91	114	39	14	23
構成比率	8.47	29.64	37.13	12.70	4.56	7.49

⑥ご自分の仕事に、

	たいへん満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	たいへん不満	無回答
調査数	20	81	102	49	21	34
構成比率	6.51	26.38	33.22	15.96	6.84	11.07

問４６　あなたの住んでいる地域には、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。震災後 6 年ほどの間で、以下のような活動にどの程度参加なさっているでしょうか。

①　地域のイベントに、お世話をする立場で参加したことがありますか

	ない	ある	無回答
調査数	234	49	24
構成比率	76.22	15.96	7.82

あると答えた人の回数

最大値	最小値	平均値	中央値
10	1	2.24	1.91

100 と答えた 1 人を除く

②　趣味やスポーツのサークルに参加したことはありますか。

	ない	ある	無回答
調査数	226	58	23
構成比率	73.62	18.89	7.49

あると答えた人の回数

最大値	最小値	平均値	中央値
50	1	9.76	14.37

90 回以上を答えた 3 人を除く

③　町内会や自治会の仕事をしたことがありますか。

	ない	ある	無回答
調査数	232	52	23
構成比率	75.57	16.94	7.49

あると答えた人の回数

最大値	最小値	平均値	中央値
30	1	3.98	5.12

問４７　チーム北リアスのことを知っていますか。

	よく知っている	話は聞いたことがある	まったく知らなかった	無回答
調査数	34	123	132	18
構成比率	11.07	40.07	43.00	5.86

問４８　チーム北リアスの今後の活動について、どのように思いますか。

	これまでのように継続して活動してほしい	時々は活動してほしい	活動の必要はない	分からない	無回答
調査数	115	24	6	144	18
構成比率	37.46	7.82	1.95	46.91	5.86

問４９　現在、野田村での生活で困っていることや、野田村の将来の生活について、お考えになっていることをご自由にお書きください。

307 名中 83 名から回答があった

回答者用質問紙

野田村出身のみなさまの
暮らしとお仕事に関する
アンケート調査

東日本大震災により被災されたみなさまに、心からお見舞い申し上げます。

この調査は、弘前大学とチーム北リアスが野田村役場の協力を得て、調査・研究事業の一環として行うもので、**野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事について調査し**、持続可能な地域づくりにつなげていくための基礎資料として利用するものです。

お忙しい中、誠に恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ご記入に当たってのお願い

1．平成29年８月時点でお答え下さい。
2．回答は、あなたご自身に当てはまる選択肢を選び、番号を○で囲んでいただく形式がほとんどです。また、一部に具体的な内容を文章でご記入いただくところもあります。
3．ご記入済みのアンケート用紙は、同封しました返信用封筒に入れて、

平成29年８月31日（木）までに

投函していただきますようお願いいたします。

- **この調査の結果や内容は統計的に処理し、みなさまの生活の現状を把握することだけを目的として利用されますので、みなさまにご迷惑をおかけすることは絶対にありません。**
- チーム北リアスは、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県の北リアス地域の復興を長期的にお手伝いしようと、八戸、弘前、関西の有志が立ち上げたネットワークです。現在は、岩手県の野田村を拠点に活動しています。詳細はこちら（http://northrias.grupo.jp/）を参照ください。
- 本調査は一般財団法人北海道東北地域経済総合研究所のほくとう総研地域活性化連携支援事業の助成を受けて実施するものです。
- 調査の結果は、2018年3月頃、報告書の形で、みなさまにお伝えしたいと思います。野田村役場で通知を行いますので、興味のある方は、お手にとっていただければ幸いです。
- 本調査でご不明な点がございましたら、電話やファクスにて下記にお問い合わせ下さい。

弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター

電話：0172-39-3198　　ファクス：0172-39-3189

E-mail：irrc@hirosaki-u.ac.jp

電話の受付は月曜日から金曜日の10時30分より17時までとなっております。なにとぞご了承ください。

この調査に含まれている内容以外で、政府や行政、当センターへのご意見、ご要望がございましたら、このらんにお書きください。

全員の方におうかがいします。

問１　あなたの現在のお住まいの所在地を教えてください。

１．野田村　　２．久慈市　　３．普代村　　４．盛岡市

５．その他　（　　都・道・府・県）

（　　市・区・町・村）

現在、「野田村」以外にお住いの方におうかがいします。問２～問８までお答えください。

➡ 現在「野田村」にお住いの方は３頁の問９へお進みください。

問２　野田村にはどれくらいの頻度で帰ってますか。

１．月１回以上　　２．２～４ヶ月に１回程度　　３．年に１～２回

４．数年に１回　　５．ほとんど帰らない　　６．まったく帰らない

７．ほぼ毎日通勤（通学）している

問３　あなたはいつかは野田村に戻りたいと思っていますか。

１．戻りたい　　２．多少戻りたい

３．どちらとも言えない　　４．あまり戻りたくない

５．戻りたくない　　６．考えたことがない

問４　あなたが野田村に戻ることを期待している人はいますか。

１．いる（具体的に　　）

２．いない　　３．わからない

問５　野田村に戻りたいという気持ちは東日本大震災で変わりましたか。

１．戻りたい気持ちが強くなった　　２．全く変わらない

３．戻りたくない気持ちが強くなった　　４．よくわからない

問６　では、実際に野田村に戻る予定はありますか。

１．具体的に戻る計画を立てている　　２．将来的に戻る予定
３．戻るかどうかわからない　　４．戻る予定はない

問７　問６で「１. 具体的に戻る計画を立てている」「２. 将来的に戻る予定」と考えた方におうかがいします。野田村に戻るとしたらいつごろ戻るつもりですか。もっともあてはまるものを、１つだけお選びください。

１．すぐにでも
２．結婚をきっかけに
３．自分または配偶者が、野田村に仕事をみつけたら
４．子どもが独立したら
５．親・義親の健康に不安が生じたら
６．自分または配偶者が定年になったら
７．自分または配偶者に、家を継ぐ必要が生まれたら
８．その他（具体的に　　）
９．具体的にはわからない

問８　問６で「３. 戻るかどうかわからない」「４. 戻る予定はない」と考えた方におうかがいします。それはなぜですか。

具体的に

➡ 次は４頁の問13へお進みください。

現在、「野田村」にお住まいの方におうかがいします。

問９　これからもずっと、野田村に住み続けたいと思いますか。

1．野田村に住み続けたい　➡ 問10へ
2．村外に引っ越したい　➡ 問11へ
3．一度は、村外で住んでみたいが、そのうち帰ってきたい　➡ 問11へ

問10　野田村に住み続けたい理由は何ですか。もっともあてはまるものを、１つだけお選びください。

1．村内に仕事があるから
2．野田村は、生活が便利
3．知り合いに囲まれて暮らしたい
4．家族が希望している
5．震災があったから
6．その他（具体的に　　）

問11　村外に引っ越したい理由は何ですか。もっともあてはまるものを、１つだけお選びください。

1．野田村には仕事がない
2．野田村は、生活が不便
3．野田村では付き合いが大変
4．家族が希望している
5．震災があったから
6．その他（具体的に　　）

問12　20歳以下のお子さん、お孫さんがいらっしゃる方、みなさんにおたずねします。お子さんやお孫さんに、将来、野田村に住んでほしいと思いますか。

1．野田村に住み続けてほしい
2．村外で暮らしてほしい
3．一度は村外で暮らすかもしれないが、いつかは帰ってきてほしい

全員の方におうかがいします

Ⅰ．震災での被害についておたずねします。

問13　お住まいに被害はありましたか。

1．被害はなかった

2．全壊（流失等）　3．大規模半壊　4．半壊　5．一部損害

問14　震災前からのお住まいについて教えてください。あなたは震災前から現在までの間、何カ所のお宅に住みましたか。

1．震災前の家にずっと住み続けている→震災前のお住まいについて、下の表の「震災前のお住まい」の欄にご記入ください

2．1ヶ所～3ヶ所 ➡ 次の表へ、順にご記入ください

3．3ヶ所以上 ➡ 現在に近い所から3ヶ所を、次の表にご記入ください

	住んだ期間	所在地	所有形態（○は1つ）	あなたの親とは（○は1つ）
震災前のお住まい	震災前のお住まい	1　野田村 （　　地区） 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．自分か配偶者の持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．親または子供の持家 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた
震災直後からのお住まい	平成（23）年3月11日 ～平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた
その次のお住まい	平成（　　）年 ～平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた

	住んだ期間	所在地	所有形態（○は１つ）	あなたの親とは（○は１つ）
その次のお住まい	平成（　　）年～ 平成（　　）年 まで住んだ または （　　）歳～（　　）歳まで 住んだ	1　野田村 2（　　） 都・道・府・県 （　　） 市・区・町・村	1．避難所 2．仮設住宅 3．みなし仮設住宅 4．親せき・知人宅 5．震災前とは異なる自分の住宅 6．その他 （　　）	1．同居 2．一時は同居 3．別居 4．二人とも他界していた

問15　あなたは、自分の生活の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

1．ほぼ復興した　　2．半分以上復興した
3．やや進んでいる　　4．まったく進んでいない

問16　あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか。

1．ほぼ復興した　　2．半分以上復興した
3．やや進んでいる　　4．まったく進んでいない

Ⅱ．震災前後の人付き合いについておたずねします。

問17　震災の前後で、野田村での、家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々とのお付き合いは増えましたか、減りましたか。

(1) 家族・親せき	1．増えた	2．減った	3．変わらない
(2) 地域の仲間	1．増えた	2．減った	3．変わらない
(3) 仕事の仲間	1．増えた	2．減った	3．変わらない
(4) 村外の人々	1．増えた	2．減った	3．変わらない

問18　現在、日常的に連絡を取っている、野田村出身の家族・親せき、地域の仲間、仕事の仲間は何人くらいいますか。そうした方々は、震災前は、何人くらいいましたか。それぞれ、お答えください。いない場合、いなかった場合は、０人とお答えください

(1) 家族・親せき	現在は（　　）人くらい	震災前は（　　）人くらい
(2) 地域の仲間	現在は（　　）人くらい	震災前は（　　）人くらい
(3) 仕事の仲間	現在は（　　）人くらい	震災前は（　　）人くらい

問19 以下のようなことについて、家族や親せき以外の、野田村の知り合いで実際に手伝ってくれたり、相談に乗ってくれたりする人はいますか。

(1) 健康の相談

1．いない　2．いる　3．震災前はいたが、今はいない
4．震災前はいなかったが、今はいる　5．必要ない

(2) 冠婚葬祭の手伝い

1．いない　2．いる　3．震災前はいたが、今はいない
4．震災前はいなかったが、今はいる　5．必要ない

(3) 農作業の手伝い

1．いない　2．いる　3．震災前はいたが、今はいない
4．震災前はいなかったが、今はいる　5．必要ない

(4) オカネの相談

1．いない　2．いる　3．震災前はいたが、今はいない
4．震災前はいなかったが、今はいる　5．必要ない

(5) 仕事の相談

1．いない　2．いる　3．震災前はいたが、今はいない
4．震災前はいなかったが、今はいる　5．必要ない

問20 普段、あなたが何かを手伝ったり、相談に乗ったりすることはありますか。

(1) 家族・親せきのために

1．よくある　2．たまにある　3．あまりない

(2) 家族・親せき以外の、野田村の知り合いのために

1．よくある　2．たまにある　3．あまりない

問21 震災から６年がたちましたが、その間、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに○をしてください。

	1．あてはまる	2．あてはまらない
①心を開いて話すことができる人との出会いがあった		
②その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった		
③被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた		
④その後の人生を変える出会いがあった		
⑤ボランティアのありがたさを知った		
⑥震災をきっかけに同志的なつながりができた		
⑦自分だけが頼りという気持ちが増した		
⑧行政への頼もしさが増した		
⑨近所づきあいの大切さを知った		

Ⅲ．これまでの暮らしについておたずねします。

問22 あなたが中学生のときからのお住まいについておうかがいします。まず、中学校時のお住まいについて次の表にご記入ください。

	住んだ期間	所　在　地	所有形態（○は１つ）	そこに引っ越した一番のきっかけ（○は１つ）	あなたの親とは（○は１つ）
(1) 中学校時の家	昭和・平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1　野田村 2（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他		1．同居 2．別居 3．その他

問23 あなたは中学校卒業時から震災時（2011年３月11日）までの間、何カ所のお宅に住みましたか。

1．１ヶ所～３ヶ所 ➡ 次の表へ、順にご記入ください

2．３ヶ所以上 ➡ 震災時に近い所から３ヶ所を、次の表にご記入ください

3．このあと引っ越していない ➡ ８頁の問24へお進みください

	住んだ期間	所　在　地	所有形態（○は１つ）	そこに引っ越した一番のきっかけ（○は１つ）	あなたの親とは（○は１つ）
(2) 中学校卒業後初めて移動した先	昭和・平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1．野田村 2．（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1．進学 2．自分か配偶者の就職・転職・転勤 3．結婚 4．離婚・死別 5．親と一緒（近く）に住むため 6．子と一緒（近く）に住むため 7．持家取得、住環境・通勤の都合 8．その他 （　　）	1．同居 2．別居 3．その他
その次のお住まい	昭和・平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1．野田村 2．（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1．進学 2．自分か配偶者の就職・転職・転勤 3．結婚 4．離婚・死別 5．親と一緒（近く）に住むため 6．子と一緒（近く）に住むため 7．持家取得、住環境・通勤の都合 8．その他 （　　）	1．同居 2．別居 3．その他
その次のお住まい	昭和・平成（　　）年まで住んだ または （　　）歳まで住んだ	1．野田村 2．（　　）市・町・村	1．持家 2．民間の賃貸住宅 3．公営の賃貸住宅 4．社宅・官舎・寮 5．その他	1．進学 2．自分か配偶者の就職・転職・転勤 3．結婚 4．離婚・死別 5．親と一緒（近く）に住むため 6．子と一緒（近く）に住むため 7．持家取得、住環境・通勤の都合 8．その他 （　　）	1．同居 2．別居 3．その他

問24 震災後、野田村に引っ越ししてきた方におうかがいします。野田村に帰ってくることになった理由を教えてください。主なものをいくつか選んでください。

1．震災があったから

2．家業を継ぐため

3．豊かな自然の中で暮らしたかったから

4．知り合いに囲まれて暮らしたかったから

5．野田村に住んでいた家族が、希望したから
6．当時の仕事を変えたかったから／仕事がなかったから
7．家族が心配で一時的に帰ってきた
8．その他　（　　）

問25　野田村に帰ってくる前に、心配したことを教えてください。主なものをいくつか選んでください。

1．収入が減ること
2．生活が不便になること
3．人間関係に不安があった
4．自分以外の家族が生活すること
5．仕事が見つかるかどうか
6．特に心配したことはない
7．その他　（　　）

Ⅳ．最後に、ご自身のことをお聞きします。

問26　あなたの性別を教えてください。

1．男　　2．女

問27　あなたの生年月を教えてください。

明治・大正・昭和・平成　（　　）年　（　　）月

問28　あなたは、長子（長男・長女）ですか。

1．はい　　2．いいえ

問29　あなたが最後に通われた学校についてお答えください。

1．中学校　　2．高等学校　　3．専門学校
4．短期大学・高等専門学校　　5．大学・大学院

問30 あなたは、現在結婚していますか。

1．結婚している　　2．離別・死別した　　3．結婚していない

問31 結婚している、していた方にお聞きします。配偶者のご出身は野田村ですか。

1．はい　　2．いいえ（　　）市・町・村

問32 お子さんはいらっしゃいますか。

1．いない　　2．いる　→　娘（　　）人　息子（　　）人

問33 野田村以外で生活しているお子さんはいらっしゃいますか。

1．いない　　2．いる　→　娘（　　）人　息子（　　）人

問34 あなたは、震災前までは何人世帯でしたか。

1．1人　2．2人　3．3人　4．4人　5．5人以上

問35 あなたは、現在何人世帯ですか。

1．1人　2．2人　3．3人　4．4人　5．5人以上

問36 震災前のあなたの主なご職業は何ですか。

1．農林業　2．漁業　3．水産・食品加工業
4．製造・生産工場　5．建設・労務　6．卸売・小売
7．サービス業　8．飲食・宿泊業　9．医療・福祉
10．専門的・技術的職業　11．管理的職業
12．公務員　13．その他（　　）

問37 震災前は、どのような働き方をしていましたか。

1．自営業・会社経営　2．家業の手伝い　3．正規の職員・従業員
4．パート、アルバイト　5．派遣社員　6．契約社員・委託
7．日雇い、出稼ぎ　8．専業主婦（主夫）　9．無職
10．その他（　　）

問38 あなたの主なご職業は、震災で変化しましたか。

1．震災前と同じ仕事をしている　2．震災が原因で無職になった
3．震災をきっかけに職についた　4．震災をきっかけに転職、転業した
5．震災前も今も働いていない

問39 震災前のお勤め先の、現時点での復旧状況を教えてください。

1．ほとんど復旧していない　2．仮説店舗・事務所で再開した
3．半分程度、復旧した　4．ほぼ震災前の状況に復旧した
5．被害はなかった　6．勤めていなかった

問40 出稼ぎの経験はありますか。

1．経験がない　2．少ないがある
3．よく行っていた　4．今もよく行く

問41 あなた個人の収入も含めて、同居している家族全体では、どのくらいの年収がありますか。税引き前の額でお答えください（手取り額ではありません）。

1．収入はない　2．100万円未満　3．100～200万円未満
4．200～300万円未満　5．300～400万円未満
6．400～600万円未満　7．600～800万円未満
8．800～1,000万円未満　9．1,000万円以上

問42 震災前と現在で収入、支出、貯金額は増えましたか、減りましたか。

(1) 収入：　1．増えた　2．変わらない　3．減った
(2) 支出：　1．増えた　2．変わらない　3．減った
(3) 貯金：　1．増えた　2．変わらない　3．減った

問43 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を０点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで○をつけてください。

0 ── 1 ── 2 ── 3 ── 4 ── 5 ── 6 ── 7 ── 8 ── 9 ──10

問44 あなたは、現在（平成29年８月）の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。以下のそれぞれの質問を読み、当てはまる番号に○をつけてください。

あなたは、震災前と比べて	1 かなり 減った	2 少し 減った	3 変わら ない	4 少し 増えた	5 かなり 増えた
①忙しく活動的な生活を送ることは、					
②自分のしていることに生きがいを感じることは、					
③まわりの人びととうまくつきあっていくことは、					
④日常生活を楽しく送ることは、					
⑤自分の将来は明るいと感じることは、					
⑥元気ではつらつとしていることは、					
⑦家で過ごす時間は、					
⑧仕事の量は、					

問45 あなたは現在（平成29年８月）、次にあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。それぞれの質問を読み、あてはまる番号に○をつけてください。

以下のことについての あなたの満足度は	1 たいへん 満足	2 やや満足	3 どちらで もない	4 やや不満	5 たいへん 不満
①毎日のくらしに、					
②ご自分の健康に、					
③今の人間関係に、					
④今の家計の状態に、					
⑤今の家庭生活に、					
⑥ご自分の仕事に、					

問46 あなたの住んでいる地域には、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。**震災後６年ほどの間**で、以下のような活動にどの程度参加なさっているでしょうか。

①地域のイベントに、お世話をする立場で参加したことがありますか

1．ない　2．ある　(平均して、年 (　　) 回くらい)

②趣味やスポーツのサークルに参加したことはありますか

1．ない　2．ある　(平均して、年 (　　) 回くらい)

③町内会や自治会の仕事をしたことがありますか

1．ない　2．ある　(平均して、年 (　　) 回くらい)

問47 チーム北リアスのことを知っていますか。

1．よく知っている
2．話は聞いたことがある
3．まったく知らなかった

問48 チーム北リアスの今後の活動について、どのように思いますか。

1．これまでのように継続して活動してほしい
2．時々は活動してほしい
3．活動の必要はない
4．分からない

問49 現在、野田村での生活で困っていることや、野田村の将来の生活について、お考えになっていることをご自由にお書きください。

質問は以上です。ご協力いただき、まことにありがとうございました。

本報告書は、ほくとう総研地域活性化連携支援事業の助成を受けて実施した研究成果である。

執筆担当者

氏　名	所　属	担当章
李　永　俊	弘前大学	第1章
	人文社会科学部　教授・地域未来創生センター長	第2章
		第3章
永　田　素　彦	京都大学大学院	第4章
	人間・環境学研究科　教授	
山　口　恵　子	東京学芸大学	第5章
	教育学部　准教授	
日 比 野 愛 子	弘前大学	第6章
	人文社会科学部　准教授	
山　口　紘　史	弘前大学	集計表
	人文学部　4年生	

2018年3月

編集・発行　弘前大学人文社会科学部
〒036-8560　青森県弘前市文京町1番地
平日 10:15～17:00
電　話　０１７２－３９－３１９８
Email：irrc@hirosaki-u.ac.jp
http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/
報告書の全文は上記ホームページでご覧いただけます